

宮崎五郎編

三井甲之選集

第二卷



宮崎五郎編

三井甲之選集

第二卷



宮崎五郎編

三井甲之選集
(第二卷)

しきしまのみち会大阪支部刊

はじめに

学生時代から幾たびか読み返し、味わい尽したつもりの三井文献を、いよ／＼選集刊行と肚を決めて改めて読み直してみた。一字一句に全心全靈を叩き込んだ三井文献は異常なまでに昂奮を誘う。読みながら注意深くマークしてゆくうちに、何時しかその世界に引きづり込まれて身体が燃えたぎってどうにも成らない。読みさしては廊下に立ち、書きかけでは庭を散歩する——三井甲之の情熱に押し流されそうに成るからである。

今まで何気なく読み過して来たところに思わぬ啓示を見出して驚いて筆を擱いたことも度々である。五月の半ごろから手がけて、六、七月はまた／＼く間にすぎた。三井文献に取り組むと一切がストップする。恐るべき魔力の主である、彼は。

三井甲之が七十余年の生涯を堵けた情熱は、いのちのふる里ことばの深海であった。汲めども尽きぬいのちの泉をコトノハノミチという一点に絞った三井甲之と一体のいのちを

生くるためには、彼の詩歌に触れねばならぬ。彼の詩をよみ、歌を味わって、再びこの選集を手にしたとき、まばゆいばかりの世界がひらけよう。彼は古今無双のコトバの魔術師であった。その魔術の種は、いつくしみ、であった。

それ故に、この選集は三井甲之入門の書であり、同時に彼の詩歌と交流し、彼の魂に触れた者にとっては、永遠の指南書となり、不滅の金字塔となるであろう。どの頁のどの行にも三井甲之の魂が輝いている。合掌した両手の間にはさんだ選集から三井甲之の魂とチカに交流する、と或る霊能者は語った。霊能をつかんだ者にとっては読むことすら要しないのである。

・生命の護符——これが一生を三井甲之に憑かれたひとりの人間の体験告白である。

昭和四〇、八、三一

宮崎五郎

明治四十三年
(上)

明治四十二年
(下)

目

次

至	自	至	自
112	83	80	1
頁	頁	頁	頁

明治四十二年
(下)

○
緩漫なる肉感趣味

直観的というのは官能的という意にもなる。伝習や空想の空虚なものに対しては、新鮮な官能的な傾向が起ころねばならぬ。けれども強さが欠けて居ると物質、五感に執着し、空想低徊趣味の淫靡に陥り、市井の俗趣味と同じになり、単一な情緒に執着するようになり、夢のような趣味になるのである。つまり主観の意志力、統一力が弱いのである。そうして単に叙述をなさむとし、外形にのみ趣味を見出すようになり、ついに伝習的、架空的趣味を喜ぶようになる。

教訓的・物語的和歌

文芸が教訓的になるのは不真面目になること、切実を欠くことである。主観的批評は、それが客観的内容の空乏なるとき、必ず教訓、理論の空虚のものとなるので、すなわち月並になるのである。

節奏と調和

和歌が抒情詩的性質のものであるのは、議論でなくて事実である。それゆえ常に人の心に直接のものでなくてはならぬ。心の声でなくてはならぬ。客観的描写も、哲学的思想また心に直接的な情調に融和せられて、切実なる節奏によって表現せられなければならぬ。この節奏とは変化動揺すなわち生命あること、活動して居ることの客観的徴候である。宇宙は一大節奏である。節奏の感じは人心を無限の境に導くこと、調和と同じである。調和は静止的性質を有して居る。すなわち同時的融合である。涅槃の表現である。節奏は継起的進行である。悲劇の開展である。それゆえ思想が間接の思考を経たものなり、また客観的光景の静止的描写をなすと、その結果節奏は減殺せられ、調和が優勢になる。もちろん和歌に間接な思考と客観的描写の必要は明らかであるけれども、これを俳句と比するとき、和歌はその形式上より節奏を重んずべきが分る。故に緩漫なる客観的描写と複雑なる劇的所作を和歌に詠むとするは大いに注意せねばならぬ。

思想的和歌

従来わが派和歌に著しく欠けて居たのは思想的方面であつた。いわゆる審美的という

考えが一般に流行して居る時代に起こった歌風で、理屈は美でない、ところ云って主観的方面に注意しなかつた。けれども、外界物象に価値ある如く、内心の思考にも価値がある。この思想の上に生命を見出すべきが現代および将来の日本文壇の趨勢である。また万葉集にせよ、外国の詩にせよ、この思想と、音楽的諧調とが詩の重要な要素であるのは明らかで、客観的物象も、それが主観的情調に融和されるときにはじめて詩になるので、いわゆる芸術のための芸術主義の詩人の作も決して単なる写真ではない。人心の反映を直接に表現したに過ぎぬ。それ故に、それは詩人の人格を反映して居る。このときその詩人が思想家であれば、その詩人の直観的表現はすなわち思想である。それゆえ思想に根柢をおく詩歌ももちろんなくてはならぬ。然るに或る一派の旧趣味に拘泥して居る人々はこの思想を根柢として居る歌を排し、また了解せぬ。思想に根柢をおくとしても心から直接に湧いたものでなくてはならぬ。すなわち抒情詩的諧調がなくてはならぬ。

客観的描写はその対象が真実のものであるから忠実に描写すれば生命がある。けれども主観的批評は極めて切実沈痛で、しかも実験によって激励せられたる深遠なる思想にともなう痛切なる情緒がなくてはならぬ。この場合に於いても必ず動機と同時にその感情的要素たる衝動を要するので、この実験より来る具象的實在にともなうべき感情的要素を欠くゆえに批評はその内的生命を失って、道学者の教訓、空虚なる理論となつて月並に墮落し、これを救済すべき新鮮なる自然が必要になる。これは実験をとまなわぬ理論の弊であつて、他の実験が消化せられずにその内容を失いたる外形として作者の思想に感化を及ぼしたる時に認めらるゝ現象である。

○

詩は散文に比すると全体觀念を分肢することが少い。簡潔は傑作の要素である。詩的であつてなお自然であるのが吾々の求むるところのものである。この内心的実験は到底現實の実験のみよりは得られぬ。必ず歴史、哲学、宗教の研究が必要である。こゝに於いて個人の心理と同時に民族の心理に及ぶ研究が必要である。国家、社会、宗教などの觀念が運び来られねばならぬ。大規模の文学が生れねばならぬ。社会改造の理想を實行せねばならぬ。それは文芸必然の要求として、上層より下層に対し、また下層より上層に対する運動よりも、むしろ内部より外部に向かい、内心より実行に至る方法をとらねばならぬ。かくの如くして自然主義は一層自覺的に進まねばならぬと思う。現今の自然派作物は生命なき旧文芸を破壊すると同時に、将来の文芸に確實なる材料を供給するものである。この材料を統一する時はじめて偉大なる文学が生ずるので、それには大なる人格、深刻なる信念を要する。差別の間に唯一の理想を求めねばならぬ。現實の活動は勿論等閑に附せらるべきで

はない。けれども現実の活動はまた歴史と全く無關係に考えらるべきではない。吾々は日本の文明を顧みねばならぬ。日本の言語、日本の文学、日本の宗教を研究せねばならぬ。奈良朝の芸術、鎌倉時代の宗教を十分に研究するとき、歐洲近世の芸術家、思想家の解かむとした問題はすでに解決せられあるを発見すると思う。自覚せねばならぬ。そうして凡てに於いて日本的であるべきを考えねばならぬ。

単一なる情緒に執着して統一を欠く低徊趣味に陥るが如きは進歩開展する日本国民には不必要である。しかも自然派作家もその思想、批評の方面に於いては低徊して居る。それ故その作物がみな単調に陥ってしまう。ことごとく同種類の作物を公にして居る。これは作者製作の動機が内に非ずして外にある故である。力は必ず内部より生るゝものである。

一人にして世界を相手にして立つ勇氣を有すると同時に、自己を没して自然に融合する無意識、無目的の涅槃の境に遊んで不死の生命を得ねばならぬ。しかもこの靈境は不可思議である。積極的には表現できぬ。形而上学および宗教々理が空漠に流るゝはこれを積極的に現わさむとする故である。二個の現象を連絡せしむるものは相 コントラスト 反の真理である。现实生活の悲哀を以て理想境の悠久の生命を暗示せねばならぬ。古來偉大なる精神が必ず憂鬱

悲哀の情調を有せるは彼らが理論的よりもむしろ實際的に統一融合の理想境に到達する深刻強烈なる意志力の内的開展を経験した故である。悲劇の真意義はこゝにある。

—— 自然派作品の意義 ・ 2 ・ アカネ ——

○ 現代人の理想は夢幻の如し

社会に上流の紳士とやうごとき階級がある。主として富財と名誉とを有し、衣食住などに贅沢をなすを理想として居る。文学を解する者にも俗社会に地位を有する人に近づき、ついにその作物はもちろん品性まで墮落させたものがある。かくの如き一人の墮落は重大な事柄でもない。けれども若しその一人のために他に悪影響を及ぼすようなことがあれば、自然こういう人間を排斥せねばならぬ。自己の墮落を他人にまでも伝染せしめる故である。こういう人間は、非常に下賤な生い立ちのものが、多少の地位、名利を得た時、うれし紛れに妄動するから起こるのである。現代社会一般の悪傾向の原因は一言で云えば広義の俄

か分限の墮落である。

趣味が全く墮落してしまつたのである。強い、しんみりした趣味が失せて、たゞ輕薄の趣味で、他に誇るとか、喜ぶとか、悲しむとかいう不徹底の差別的感情に低徊して居って、虚偽の外面を以て終始して居る。誇るとか、喜ぶ、悲しむなどという差別を徹してしまつた、強い、深い趣味は知らぬものが多い。こゝに文芸の真意義があるのだ。これは人心の默契に存するので、二人居つても、三人居つても、その心は一つになる時である。このとき各人は自らも想像せざりしほどの境に入るのである。差別、比較等は消え失するのである。名づく可らざる不可思議の感に打たるゝのである。

日本現代の國民一般の生活は日に悲惨になりゆくのである。それは、人生を誤解して居る人間が妄動するから、一般の人民がこれを模倣するのである。吾々は模倣せずに自覺せねばならぬ。

墮落の原因は模倣にあり

都會にても田舎にても墮落するものは多い。普通の意味に於ける墮落以外に、文學者の趣味の墮落、一攫千金を夢みて財産を失い、又は罪惡を犯すという如きもまた墮落の一種

である。

この墮落の原因はたゞ一つであると云つてもよい。それは模倣である。流行に動かさるゝのである。盲動するのである。現今流行の成功談の如きは最も危険で、人を墮落せしめ、盲動せしむるものである。

自分に修養の努力もなく、従つて実行の意志もなく、漫然盲動して他の成功者の犠牲となるのである。真に自己を知り、確実なる行動をとらねばならぬ。けれどもこの自覚は困難、逆境に処せなければ生ずるものでない。この困難、逆境もこれを感じずる敏感がなくては自覚の縁とはならぬ。この敏感は殆んど天性であろう。それゆえ人の迷惑などを何とも思わぬような敏感のない人間は到底救うことは出来ぬ。人がひとたびこの敏感の有無ということに注意すると人生の問題は直ちに解決する。

真の文芸は現代の風潮に反対せざる可からず

愚人となり、他を模倣し、雷同を事とし、夢をみて一生を送ろうとするには戯作者流の文学でもよかろう。けれどもいやしくも更に高尚なる趣味を味わむとするには現代の悪風潮に超然たるところがなくてはならぬ。必ず深刻なところがあつて、他に異つて居るとこ

るがなくてはならぬ。単に巧妙なる観察をなし、外圍を細叙する以外に、偉大なるエネルギーの生活を写して、現代に覚醒を与うるものでなくてはならぬ。俗に媚びるものゝ如きは排斥せねばならぬ。日本現代の小説作家のごとき、多くは戯作者に過ぎぬようだ。

独乙で有名のハウプトマンの如きもいわゆる自然派詩人にすぎないので、決して偉大の人物でない。その「沈鐘」をゲーテのファウストに比較し、更にハウプトマンを世界的詩人であるとする如き衆愚の評もあつた位いで、平凡のものは直ぐ分るから淺薄な公衆の喝采を得るのである。けれども現代の愚衆の媚を買う位いならば、文学などは止めた方がよい。ハウプトマンの描いた残ブルクラーグ忍の如きも、全くこしらえもので、眞の力がない。主として細

かいことの叙述をして居るのに過ぎぬ。また外圍を細叙してもやはり技巧で、自然と眞とを傷っている。それゆえメロドラマというようなもので個性が現われないで単に類型が現われて居るばかりだ。竹風と鏡花で訳した「沈鐘」の如きも、補綴してなつたもので、こしらえものゝ標本である。ハウプトマンが自然主義から象徴主義へ變つたなどと云つても矢張りつまらぬものだ。一般に自然主義の一派または硯友社の系統をひいた戯作者、写生文などは偉大なる人格、理想などは現わさずに技巧のみで、単に誰にでも合点のできる初

歩の人間精神の啓示をなすに止まって居る。痛切なる感情、精神の高尚深刻がなくて、そのいわゆる美なるものが簡明を欠いて、嬌態を呈し、銜氣を帯びたものである。

大なる詩人でもなく、眞の劇作家でもなく、純粹なる悲劇作者でもなく、単に日常生活の表現者にすぎない。畢竟するに個人的利害のほかに眼中何物もなき人々である。日本現代の写生文派も何派も、みな自然主義に外ならぬ。つまり自然主義が今日一般の文芸の頂点と思えば情けない。新体詩人も自然主義にかぶれてしまった。けれども自然主義の主張は決して非難すべきではない。作者の人格に一層の向上を希望するのみである。自然主義を排したとて、鏡花や沈鐘など持ち出すような愚を演じようとは思わぬ。

自然主義の転化について

現代人の生活はいわゆる自然主義である。現代人の理想が転化すると同時にまた文学も転化せねばならぬ。物質を過重する現代の反対に精神を重んずる時代が来らねばならぬ。ガイスト主として象徴主義というような方面に向かうであろう。まづ女性的頹廢、酒神的超人、原始的神秘というような方向をとるであろう。そうしてやゝともするといわゆる怪奇なものとなってしまう。その他郷土芸術と云い、娯楽文学と云い、自伝小説、社会小説と云うが

如き種々のものが生ずべきであらうけれども、単に外国文学の感化に呻吟し、または旧文芸、旧思想に回帰するに止まって居るならば何の役にも立たぬ。新たなる理想の建設に向かわねばならぬ。これは議論ではなくて創作の範囲である。

— 評 論 —
・ 3 ・ アカネ —

○

万葉集は後世文学のあらゆる要素を有す。故に価値を有する歌人のみならず、何らか一特色を有する歌人はことごとくこれを研究せむとす。赤人は吾人の見るところによれば決して人麿と並稱すべきほどの歌人に非ず。されどもいま赤人を論ぜむとするものは人麿、赤人と並稱する伝来の謬見を破り、同時に古今集以後の和歌にうつりゆく過渡の情態を研究せむがためなり。赤人は目前の花を見てその色を知り、その配合、排列を知れり。されども絢爛たる外面の、内部を貫ける唯一真理の寂寥を知らざりしなり。憶良は天平時代の裏面を歌わむとせり。旅人は裏面より見たる表面を歌わむとせり。表面より見たる表面を

歌えり。文明社会の表面に立てる人間は、社会なる有機体の一要素として存在の意義を有し、個人としての意義を有せず。故に文明社会の表面に動き居る人間は個人というよりも天然の一部分という方当れり。生存の欲望すでに満足せられて、満ちたる心を以て彷徨するものゝ眼に映ずるものは外部の装飾なり。わが国土の生活に適する氣候を有するのみならず、明瞭に区分せられたる山野の河川、湖海により雲霧、草木により明瞭に装飾せらるゝを以て、日常この間に愉快に生活せる国民は、自然沈痛の趣味を欠き、淡泊温雅の趣味發達し來れり。外に美飾をなすものは精神を忘却す。偉大なる精神力を表現する彫刻は、粗大なる面と線とを以てその内的生命を活躍せしむ。繽紛たる繁飾をなすものは眼光茫然たり。春の花を見て人は酔い、秋の落葉をきゝて人は醒む。芸術は古代に榮えたり。物質的文明初步なるだけ、内心の活動激烈なればなり。しかして詩歌の繁榮は美術の繁榮に先立たざるべからず。美術の精神よりも外形を過重し、実世間的權威の保護によりてはじめて製作せらるゝものなるを以て、個人の作たることよりも時代の産物たることの性質を多く有すればなり。写実主義は理想よりも、現代内面よりも、外面を写すに傾くは自然なり。詩歌は人為のはからいを破りて、本来の自然に帰するを目的とす。故に太平の世に、運命

のまゝに浮沈する人間は、一見するとき意志なき天然の如く美なることあり。また天然自身は、もとより直ちに文学美術の内容たり得べし。然れども天然および天然の如き人間は、個性を発揮せる人間に比するとき比較的静止の状態にあり。されども詩歌の主たる内容は静止せる現象にあらざりて動揺せる現象たるべきはずに述べたるところなり。故に詩歌の内容たるべき天然は、吾人の精神により生命を与えられ、活動に置かれ、人格化せられたる天然ならざるべからず。故に若し外面の色、形および排列のみを写さむとするときは詩歌に於いてはその材料たる言語の能力は到底絵画に於ける絵具に及ばざるを以て、芸術全体より見ればついに生命なき作の濫作となり、また外形を尚び、精神を忘るゝ故に、模倣的に傾き、伝来の陳腐なる思想の反復となるべし。且つまた写實的文学は偉大なる精神を有する天才に非ずとも、忠実に写生するときはなお文学として価値あるを以て、平凡なる多数の作者の無数の作を生じ、腐敗せざらむとするも得ざるに至る。故に写實的詩歌は天才の出現にいたる導火線として意義あるものなり。何となれば詩歌は没却せられたる個人威嚴復活の声なればなり。

山部宿禰赤人望不尽山歌一首並短歌

天地の分れし時ゆ神さびて高くたふとき駿河なる富士の高嶺を天の原ふりさけ見ればわたる日のかげもかくろひ照る月の光も見えず白雲もい行きはゞかり時じくぞ雪はふりける語りつぎ云ひつぎ行かむ富士の高嶺は

有名なる歌なり。調べのととのえるはよし。されどもかゝるうた万葉集中に珍らしからず。「わたる日のかげもかくろひ照る月の光も見えず白雲もい行きはゞかり」はこの歌の生命なれども、これ山峻高以蔽日 日月避隠 日月蔽虧 などの誇張的支那思想にして連山には適用すべきも、富士山のごとき孤立せる円錐形の火山には適切ならず。要するに目前に見たる富士山をそのまま描かずして伝来の思想を借り、或いは概括的に「時じくぞ雪はふりける」とように云い、決して客観的光景を目前に浮ばしめず、かゝる記載的叙法を以てすれば地理学書をよむ心地こそすれ、何ら感興をも起こさず、何ら異常の感動もなく、余りに冷やかに富士山を望見し、当時すでに漢詩にも詠ぜられ通俗的になり居りし思想を反覆したりとて詮なきことなり。反歌

田子の浦ゆ打ち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける

「打ち出でて」「漕ぎ出でて」とするの直覺的なるに如かず。「真白にぞ雪はふりける」とこそ云うべけれ、これを「不尽の高嶺に」の句を中間にはさみて直接なる会得に不便ならしめたる所以のものは動ける感情なきに技巧と模倣とにより外形を補綴するを以てなり。真実なる感情を忠実に写さば、如何にするもかくの如き不自然なる叙法をなすことあるべからず。

同卷山部宿禰赤人至伊豫温泉作歌一首並短歌、これ舒明天皇、斉明天皇の行幸と聖徳太子の御事蹟とを追懐して作れるなり。これも人麿らを模倣したるならむ。されどその価値に於いては天地の差あり。その反歌、

百敷の大宮人のにぎ田津に船乗りしけむ年のしらなく

これを人麿の

さゝ波の滋賀の大わたよどむとも昔の人にまたも逢はめやも

に比するに、赤人の歌の氣力なき、驚くべし。人麿の結句「昔の人にまたも逢はめやも」と屈折し弾力あるに比し、赤人の「船乗りしけむ人のしらなく」と、か弱く云い切りたる、日を同じくして論ずべからず。

同卷登神岳山部宿禰赤人作歌一首並短歌、その結末、「見る毎にねのみし泣かゆ古へ思へば」と云えれど「玉葛絶ゆることなくありつゝもやまず通はむ明日香の古き都は山高み河遠白し春の日は山し見がほし秋の夜は河し清けし朝雲に田鶴は乱れ夕霧に蛙はさわぐ見る毎にねのみし泣かゆ古へ思へば」という続きを見なば、絵のごとく美しき対句を以てして、うれしみこそ思われるれ、少しも悲しき調子なし。懐古の歌には「ねのみし泣かゆ」などというのが例なりとて、悲しからざるに悲しと云うその不調和なる感情の真偽を疑わしむるに至る。その反歌、

明日河川よど去らず立つ霧の思ひすくべき恋にあらなくに

「恋」は全く抽象的概念となれり。序歌も後世の掛け言葉のごとく冗漫になれり。彼は主観的感想を歌うべく余りに楽天的なり。

第六卷神亀元年甲子冬十月五日幸紀伊国時山部宿禰赤人作歌一首並短歌。長歌は伝来的形式の反復なり。反歌、

奥津島荒磯の玉藻汐満ちていかくれ行かば思ほえむかも

若の浦に汐満ちくれば塩をなみ芦辺をさして多頭なき渡る

「汐満ちていかくれ行かば」「思ほえむかも」みな現在活動せる感情なく、思い巧みたる、決して大家の作たるべき簡明を有するものに非ず。第二首は有名の作なれども、決して優秀なるものにあらず。「塩をなみ多頭なき渡る芦辺をさして」とこそ云うべけれ。

「真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」と云えると同じく、音調および思想は「塩をなみ」にて中断せられ、全体の音調および思想全く冗漫に流るゝものは「塩をなみ」の全体を分割する力強きが故なり。感情に直接に云わば「塩をなみか」とようにこそ云うべけれ。人麿の「春日か霧れる」と云えるを「春日霧れゝば」とせば趣味索然たらむ。故に若し「塩をなみ」と強く云い切らば直ちに「多頭なき渡る」と活動せる句を持ち来らざるべからず。「芦辺をさして」の如き句を挿入するときは、全体の接合密なる能わず。これ音調を閑却せる三句切れのやうやく発展し来りたるが故なり。而してこの歌の各句の切れかた強し。すなわち各句は独立したる内容を有するようになり、全体として極めて複雑なる思想を運ぶに至る。故にかくの如き近世的煩雑を有せる詩歌は材料を重んずるに至り、肉感的に走り、思想の屈折を重んずるに至り、理屈に走り、更に教訓的傾向を生ずるに至る。今この

「若の浦」の一首を誦して、直覚的にはその趣味を感ずべからず。必ず会得するに一種の努力を用いざるべからず。何となれば一首は直覚的なる感情の表現に非ずして、或る現象を因果關係に分解して表現したるものなればなり。この因果關係を暗示するものは「塩をなみ」の断定的一句にして、これが下に来る各句の現わすべき内容の豫件たるを暗示するなり。而してかくの如き平凡なる暗示を了解したる間接なる智的満足を読者に与うることがかくの如き第二流以下の歌の通俗的になりたる所以にして「朝顔につるべ取られて貰ひ水」の如き句の通俗的になりたると同じ理なり。「汐満ち来れば」も露骨の云い方なり。複雑なる趣向決して悪しきに非ず。これは数首の連作を以てすべし。

—— 山部赤人の歌を論ず（万葉集の写実派歌人・4・アカネ） ——

○
今回は実朝の歌について二、三の観察をして見よう。いづれ実朝については国史上の研究とともにその詩人としての生活と作物とを詳論する計劃である。単に万葉集についての

み研究するよりも、時々近世の歌についても研究する方がよいと思う。

枯れはてむ後しのべとや夏草のふかくは人のたのめおきけむ

恋の歌である。深く相恋うるは障害がある故である。これが恋の真相である。深く思ふとも遂げられぬ恋にて、遂げられぬゆえ深く思いまさるのである。それ故この思いは死後まで残る。永久に残るといふ意志力を根柢にした歌である。「枯れ果てむ」はもちろん形容的、比喩的に云ったのである。枯るゝというは死のことである。「夏草の」というは、「深く」と云うためで、夏草の深くというに對して枯るゝと云ったのである。

「しのべとや」というのはやゝ間接で「ふかくは」の「は」も全体を概念化するもので、当時一般に行われた思想的和歌の弊である。「たのめ」というは万葉集の語と比すると近世の発展にかゝるものである。

おく山の岩桓沼に木の葉落ちてしづめる心人しるらめや

岩桓沼は万葉に、岩桓淵などもありて、岩が桓の如く立ちかこんで居る沼。「おく山の岩桓沼に」といふ調子がよい。「木の葉落ちて」と切ったところもよい。しづめる心、秘せる心の強い思いを歌うたのである。すべて実朝の歌は眞実があつて、他の模倣によつ

てのみ作歌した当時の歌人中にあっては実に驚くべきものである。実朝の歌は調子が強いというのが一般の評である。調子はもちろん強い。けれどもその強い調子の歌で有名な、
時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめ給へ

ものゝふの矢なみつくらふ小手の上に霞たばしる奈須の篠原

などを作っている作者が、一方に「おく山の岩榎沼に」のごとき歌を作って居るのは注意すべきことである。「おく山の」の歌のごときは実朝歌集中ずいぶん多いので、この種類の歌は作者の心の直接の発表であって「時によりすぐれば」などはもう少し間接の方面を歌ったので、いわゆる客観的の歌である。

真の詩人はこの客観的方面の作よりもその心に直接な抒情的方面の作にその詩人特有の情調を発揮するもの故、たとえこの抒情的の作はとかく陳腐の感があるにせよ、充分の注意を以て研究せねばならぬ。真淵をはじめ一般の批評家が実朝を論ずる時は、主として、「八大竜王」「山はさけ海はあせなむ」などの歌についてのみ云うのである。これと同時にまた注意すべきは純思想的の歌である。

ろつゝとも夢ともしらぬ世にしあれば有とて有と頼むべき身か

思罪業歌

ほのほのみ虚空にみてるあひちこく行方もなしといふもはかなし
の如き作のあるのを注意せねばならぬ。実朝の歌はみな根柢に真実がある。すなわち心から湧いた歌が多い。それゆえ伝習的の題詠でも

草に寄せて忍ぶる恋

我が恋は夏野の薄しけゝれどほにしあらねば問ふ人もなし

の如き、みな実験により、実感により生命を有せしめられ居るを認むべし。実朝の歌に生命のあるのは全くこの実生活よりの経験を歌いたるによるものである。露骨に云えば実行と文芸との間隔がないところがよいのである。文学が遊戯でないのである。これを定家のきえわびぬうつろふ人の秋の色にみをこがらしの森の下露

という如き軽薄のものと比する時は、実朝が当時の歌人中に於ける価値は分明になる。「みをこがらし」というごとき言語遊戯の拙を極めたものである。

○
印象主義的作歌法

実社会に触れた歌、新時代の言語をもって新時代の思想を歌うと云い、支離滅裂の歌を作る世間一般のいわゆる新派の歌なるものは、ちょうど「新半面」で人生問題を詠ずるつもりで「春風や悔いは解けたる帯に似る」というような俳句を作っているようなのと、前号歌壇漫言で評した与謝野寛氏の歌の「高ぶらず錢惜しみせず笛ゆうに吹けど足らざるものあんなれ」という歌の如きは、技巧上の理解がない門外漢の歌俳である。同時にかくの如き門外漢と伍して門外漢の不健全の趣味に感化せられ居るものがわが派の一部に（もちろん少数なれども）生じて来た。そうして真の歌をつかまえて幼稚平凡など云うのみならず、心中それを信じているようであるから、甚だ面倒であるけれども少し詳しく論じて見よう。

「新半面」や「新詩社」の人々が歌俳で人生を歌おうとするのはよい。その動機はよい。

けれどもその動機は内心の要求からではなく、世の大勢に迫られての盲動である。真に歌俳を研究すればかゝる句、かゝる歌が文学でも何でも無いという事がすぐ分ると思う。句のことはいま止めて、歌に於いて前掲の寛氏の歌の内容は、たかぶりもせず、錢も惜しまず、而して芸術に身を寄せて居る、かくして内心に満足あるべきなれど、何か一つ足らぬものがある、と云うのは一小説の根本思想としてはよからう。小説であれば、かゝる境遇にある人が或る点まで実在的に現われて来る。客観的に現われて来るから、そこで読者は客観的対象の實在にともなう情緒を起こして来て、文学的作物の第一の条件たる直観的了解を有するようになる。けれどもこの小説または劇の根本思想たるべきものを、一首の短歌に詠じたのでは少しも感情的要素すなわち客観的内容のないものとなってしまう。それ故かゝる思想を歌に詠ぜむとするなれば、まづ印象主義的に作ればよい。今日に於いては歌を作るにも、少しは文学上の技巧の研究をせねばならぬ。さもなくば歌を作るをやめて小説を作れば却って成功すると思う。歌を作るには小説に於けるよりも細かい技巧が必要であるのは云うまでもない。歌を作るには或る点まで画家が技巧を練習するようなことをせねばならぬ。それゆえ寛氏の歌のごとく人生観の結論を報告することの代りに、その結

論に達する径路を歌うようにして、抽象し、概括した結論、分類配合した材料の間接なるものよりも、その瞬間に生きて居る実地の感じを直観的に表現せねばならぬ。

そうするには、絵画、彫刻などに於ける印象派の研究をすると有益であろう。实例について云えば、女子に対しての感情を歌うに、その姿が目を去らぬとかいう結論に至るまでの径路すなわちその女の容貌と精神的活動から受けた直接な、新鮮な印象をそのまゝ、而かも主要な印象を活躍せしめねばならぬ。そうして形を整えることを主とするよりも、主要な印象すなわち主要な調子、色合いを活躍せしむるようにせねばならぬ。材料を整理、統一した輪廓よりも、整理の材料そのものを表現するようにする、すなわち感情、しかも活動して居り、興奮緊張して居る心の動揺進行のまゝ全体を歌うのに、その心持ちの主要な部分をとって歌うのである。それには心の動揺進行すなわち心的経過を歌うには、動揺と云い、経過と云い、もちろん時間ということも考えに置いたのであるから、この心の時間的に進行してゆくのをこれに平行して歌に作るならば必ず数首の歌になる。「連作」の真意義はこゝに認めらるゝのである。明星派の歌はもちろん、一般新派と称する歌人の歌は単に誰れ／＼の歌を作つて居るに過ぎぬ。それゆゑこの一首へいわゆる近世的の複雑な

思想をつめ込もうとする。それゆえ具象的要素がなくなつて、単なる理論や感情の輪廓のみとなつてしまふ。近き左千夫氏の作アララギ二号の「採草余香」という歌、はじめの三首をとつてみる。

秋の野に花をめでつゝ手折るにも迷ふことあり人といふもの

群肝の燃えてちぎるゝわが思ひともしのねぢを心にもかも

世の中の人のいがみの醜団ほふりつくさば後は安けむ

の如きを見ても、また世間一般の歌風に近づいて居るのがわかる。全体に世間に対してこれを嘲ると同時に、自己をも嘲るといふような心持ちを詠じたのである。それゆえ世間一般の歌と比すると、連作の性質を有して居るけれども、各首は漸次独立せむとして居る。概括した結論「人間にはひがみがある、これを除きたい」といふようなことはほど分る。けれども作者心中の心持ちとはよほど離れたものになつて居る。また客観的制限もなく、時間的の階級もない。全く抽象的思想が現われて居るのみである。作者が何処に於いて、また如何にその感情が進行したかといふことは少しも分らぬ。

それゆえ作者の作歌の動機 (Motiv) 中その動因 (Beweggrund) は分るけれども衝

動因 (Errebjeder) は分らぬ。

これがかゝる歌の芸術的要素を欠いて居る所以である。これを伊藤桐梧氏の「虫声」
(日本及日本人所載)

恋ふらくも生ける間と夜ひるに鳴くかも汝はたゆたふなしに

灯火に来寄りさまよへたゆたひに汝が鳴く姿見るにともしも

虫けらとつね罵れどあからさまに恋ひ鳴く汝にわれ如かずけり

われも恋ひき恋ひて泣きにき然れこそしき鳴く汝に心を寄すれ

の如き、印象派的作風が著しいものではなく、従つて思想的の歌であるけれども、内部の感情が充実して居るから、いわゆる情と景とが融合してこの四首は密接に統一せられて居る。虫の声をともし火のもとに夜きいて居るといふ客観的制限と、その虫に対する作者の感情とを自己の恋の追想という主要な感じを以て十分に統一して居る。この歌に於いては理智と感情とが融合して居る。すなわち文学最終の目的を達して居る。元來作物に対してかゝる積極的分解を試むるのは作者に対し敏感を欠くことであるけれども許容せられたい。今いう理智というのは前に云つた動因の内容のことで、感情とは衝動因の内容である。

「復活」に現われしトルストイの宗教

トルストイは現代文明に対する問題提出者のひとりである。彼は問題を提出したけれどもこれを解決しなかった。その観察は緻密であるけれども遂に統一せられずに、開発すべき新信仰の材料として吾々の前に提供せられた。

彼は諷刺やカリカチュールの頓才を有して居ったけれども、一切の現象を抱合して内情的活動に融合せしむる神秘を有して居らなかつた。事物の全体を直観してその本質を感じ得する詩人ではなくて、論理によって部分を分類し表面を記述する科学者であつた。論理に依立して神秘を有せぬことは近世的悲劇の原因である。

近世的精神の覚醒はわが国に於ける親鸞と独乙に於けるゲーテとにその偉大なる先例を見出すのである。トルストイもまたこの近世的精神覚醒の一例である。近世的精神の第一

の特徴は、客観的内容の充実である。人生問題を人生の活事実を以て解決せむとするのである。宗教および伝説により、無意識に注入せられたりし信仰は、五感に直接なる客観的内容をとまなうて意識的に示されねばならなくなった。現代および将来の文学は過去の神話、伝説、宗教、哲学を総合すべき大使命を有するを自覚せねばならぬ。

トルストイは異常の天才と豊富なる実験を有して居ったけれども、観察せられ、記述せられたる事実を統一せむとする時、彼は詩を以てせずに論理を以てした。神秘を以てせずに教訓を以てした。トルストイは宗教的信仰を味わった。けれどもその信仰に執着してしまつてこゝに止まろうとした。要するにトルストイの一生は多少の余祐があり、苦痛の感じがそれほど痛切でなく、自己の存在を自覚するよりも、外物を観察賞玩するに傾いたのである。また人生に対する老成と倦怠との結果でもあろう。トルストイは愛し得るものが始めて憎み得るを洞察せずに、愛するが故に憎む人となった。疑惑と驚嘆に全身を没せずして、有限なる自己の智識に止まつてしまった。それ故トルストイは観察者であつて科学者の冷たさを有して居った。トルストイは人生は一切であることを知つたけれども、同時に人生は無であることを知らなかった。トルストイの人生観は人生の大海に於ける鹹味を

失ってしまった。生命は各瞬間に新たに生るゝもの、すなわち実験によって常に新たにすべきものであるを忘れた。生を費さねば生れぬ熱を失って、冷たき教訓となり、ドクマとなってしまう。トルストイは常に他一切を排して愛を説いている。けれどもその愛の強さが足りない。内的の偉大なる愛にもなう苦痛を経験することが痛切でなく、その愛の経験は靈的の強さを有せずに、一種肉感の失望にもなう弛緩を有して居って、永久なるべき節奏は肉体的分解作用によって静止を来したのである。

トルストイは自己の観察と実験とよりの個人主義に止まって居るべきであるのに、更に一步を進めて理論によっての汎神論を以てして、空虚なる教訓的態度に出で、聖書中つねに個人を眼中に置く臨機の戒律を直ちに一定の法則とした。無抵抗主義の如きは全くこれである。これを十分に観察するときは、一方トルストイが自然主義的、破壊的傾向を有して居ったゆえ、基督教に対しても現存の教会に対しては勿論、その教義の根本に対しても無意識的にせよ、一私の反感を有して居ったので、基督教から科学が宗教的神秘を奪ったその結果、バイブルは一種の文学となつてトルストイの目に映じたであらう。トルストイはかくの如く肉感的文学以上の何ものかを要求して居った。それゆえ、バイブル中の句を

も基督教本来の意味以外の意義に解せむとして遂にこれを人為的道德に墮落せしめたのである。基督教より解脱せむとする無意識の努力は近世独乙の哲学者、芸術家にその著しき徴候を認むるので、東洋思想の感化を受けたトルストイがまた同一の傾向を有せるのは興味あることである。けれどもトルストイの祖先とその天稟の素質と境遇とは彼をして深遠なる涅槃の哲学を了解する能わざらしめたのである。

既存の文明を保持せむとする西欧の文明に対し、限りなき荒野にさまよいつゝも新たな建設に従事せむとする露國の思想界に於いてトルストイは新たな建設の材料を供給した。けれどもこれに一定の形式を与うべき精神を欠いて居った。哲学を欠き、信仰を欠いて居った。現代の文明は煩雜をきわめ残忍をきわめて居る。けれどもこれを統一せむとする天才の努力がひとたび勝利を得たときには、その悲劇は前代に見るべからざる莊嚴と威力とを以て顕現するであらう。

それには現実の悲哀、罪惡のそのまゝ直ちに光明に同一化する宗教的、詩的狂熱を要するのである。換言すれば現実そのまゝを神秘と見る内心の深刻、沈痛なる感動がなければならぬ。トルストイは現実以外に神秘を求めむとして、理論、論理、偏見、仮定に墮落し

たのである。

田山花袋氏の「生」

自然主義の極致は日本近世の宗教に於いて十分実現せられて居ると信ずる。自然主義派作家および文芸批評家は西洋の哲学以外に日本に於いて実験的に開展した宗教を研究したればよいと思う。宗教ということが常に万人に同一の制服を強うるような傾きのあるのは極めて遺憾のことであるけれども、宗教と云っても人間を外にして存するものでもない。歐洲の大作家がつねに天童的の若さを有して居るのは、その思想の根柢に宗教と哲学とより養われた出世間的傾向があつて、そのために実世間の実験がつねに刺戟されて活躍し、その青年的の活動を失わぬゆえであると思う。没理想とか、無解決とか、客観を重んずるとか云つても、無解決と云つても一種の解決であつて、普通一般人の生活に対する考えに比するとももちろん理想的であるから、現実と理想とを分離せざる限り、現実そのものに理想を求めたらばよいと思う。この点から見て日本近世の宗教は、國民が戦國時代の悲惨な生活を経験し來つて、新たに生れた宗教であるゆえ、現世を捨つることが極端であるだけ、現世の活動に無極の力を見出したのである。宗教的情操がないと折衷、中庸の平凡に陥る

恐れがある。歐洲の作家がつねにその祖先を回顧して、こゝに思想の泉を汲まうとして居るのは、単に過去の幻影を憧憬する以外に、現実に強い意義を見出さむとする故であると思う。米國の如き新らしき國はルーズベルトの活動位いを理想として居るのもよい。けれどもわが國に於いては文明史の研究は歐洲文芸の研究よりも必要だと思ふ。露國の文學のことはよく知らぬけれども、露國民の文明に対する恐怖は一種のトラディションであると思ふ。云つてもよい位いなのは、露國文芸に特殊の生命と力とを与えたのではないかと思ふ。日本文學史上、天平時代よりすでに文學が輕浮に流れたその原因が自覺の苦痛よりも模倣の享樂に耽つた故であると思へば、今日の自然主義作家に対して歐洲文芸の研究と同時に祖國に対する追慕の情を強められむことを希望したい。

花袋氏の「生」と藤村氏の「春」とを比較して論ずることが流行して居る。けれどもいま吾々の立場として、これを虚子氏の「俳諧師」と比較して論じて見よう。花袋氏の作は虚子氏の作と比較すると、神秘と詩とを有して居る。花袋氏の主張は客觀に重きをおくと云うのだけれども、元來精確に云へば經驗の対象というのは、經驗を客觀化したものである。エムファーズ經 驗が第一の存在で、オブジェクト対象はこれを客觀化したる所 プロダクト産である。實經驗に含有

せらるゝ主観的成分を抽象するならば、こゝにはじめて主観と関係なき客観が可能である。けれどもかくの如きは全く自然科学の対象たるべきもので、人生を表現せむとする文芸にはかくの如き抽象は排さねばならぬと思う。人生という語人身が時間の観念を予想して居るので、時間、詳しく云えば遅速とか断続とかいう時間的進行の種類以外に過去、現在、未来に対する時間的階梯を予想せねばならぬ。社会劇、社会小説にしても、先祖とか遺伝とかいうことを暗示せねばならぬのはこの故である。花袋氏一派の意見は旧文芸に対する反抗と、空想的の情緒の虚偽を排するよりの意見であつて、文芸の理想は現実の経験を離れたる空想的の主観的情緒でなき如く、また実経験より主観的成分を抽象し去つた生命なき形骸（かくしては時間の観念をとまなわざる存在となる、すなわち一種の仮定すなわち分解の結果たる部分的存在に外ならぬ）でもない。こゝは実 ワイルトラフヘル、エルハルツク 経 験そのまゝの直観的表現が文芸の理想であつて、印象主義の如きはこの直観的表現に対する技巧の見地からの命名であるとするのが正当と思う。しかし花袋氏の主張は創作の実験上、同氏および現代文壇に対する刻下の要求と見てこれを文芸の根本的理法であるとせぬのが至当で、この見地からは吾々もまた排技巧、排主観、無解決より歩を進むべきで、空想、論理、メタフ

イジクなどから出立する文芸の必ず虚偽に陥るのを排せむとするのである。けれどもこれは出発点に対しての注意であって、決して文芸に対する一定の法則ではないと思う。それゆえ花袋氏の作はこれを虚子氏の作と比較すると詩と神秘とがある。こういうのは作者の主張と一見相反するようであるけれども、いま詩とか神秘とかいうのは、一方これを写生文派の小説と比較し、その差を明瞭ならしむるために云うのである。

虚子氏の小説は確かに一方技巧に長所がある。その技巧というのは俳句製作上より来る句切れの呼吸が文章に一種の緊張を与え、その俳句、写生文より得たる緻密の観察が一種の豊富なる色彩と明快なる調和を与えて居る。それゆえ読み易く、頭に入り易い。けれどもついに一種の描写家にすぎぬような感がある。哲学がない。これに比して花袋氏の作は読みにくい所があり、文章として多少のタルミがある。けれども読み終って統一した唯一の感じが残る。これを詩と云い、神秘と云うのである。更に形容的に云えば陳腐な云い方であるけれども虚子氏の作より花袋氏の作の方が深い、強いと思う。虚子氏のは余祐があつて本気でなく、人生の原始的本性よりも文明的補充を描いて居るように思われる。すなわち遊戯的である。虚子は文章家であるけれども詩人でないような気がする。花袋氏のは

文章は多少のタルミがあつても詩人的のところがある。この詩人的の情緒を抒情的に表現せずに、この情緒を客観化して読者に暗示を与えむとするは技巧の最上のものであつて、花袋氏の主張をこの意味に解すべきであらう。それゆゑ技巧の問題と文芸の全内容すなわち文芸の理想の問題とはある点まで分離して論ずべきで、二者を混同することは誤解を招きやすいと思う。

花袋氏の「生」は現代自然派作物中の傑作であると信ずる。技巧を離れて文芸の価値を論ずるは空論になりやすいけれども、技巧以外に歴史、哲学、宗教、伝説などを實在化したるものとして人間を取扱うこと、すなわち人格の問題をも眼中インテグレートにおくことが直接なる実経験の全体の表現に対する力を得る唯一にして最後の問題であると思う。以上は日本現代の自然主義派に対して吾々の所見を明らかにし、更に吾々と近き関係にある写生文派に対する吾々の態度を明らかにしようと思うて論じたのである。

飲酒と自殺と示教

複雑なる社会情態のもとに呻吟して居る一般人に向かつては、実生活は一種の圧迫である。殊に都会生活をなすものは、極端なる消極的注意を払って自己の發展を抑制せざるべ

からず。ゆえに異常の感激、不平のために飲酒する以外に、一見平和なる生活を送るものもまた飲酒によってその蒼白なる身体に多少活潑なる血液の循環を見るとともに、朦朧たる醉眼に外物の投影を滅却して、内心の情緒の流動を自由ならしめ、はじめて生きた心地に立かえるのである。この内心の情緒の流露本能の覚醒は、肉体を破壊することによって実現せらるゝのである。元來、精神と肉体、精神と物質とを二つの異りたる存在なりと仮定する哲学的見解は吾々の信ぜざるところである。けれども、人の全生活を論ずるに於いてはこれを分解して精神と肉体との二者を仮定するのが便利である。吾々の信ずるところは、精神という仮定的分類よりも生死という事実を以て論の根柢とする方が適當であると思う。生の極端なる發展は肉体の最も活動して居るときで、その活動の極はその形を失なう如きに至り、曠野に立って天を仰ぐが如く、観者に無限の感情を起こさしめ、神秘の感情を起こさしむるのである。いわゆる端倪すべからざる情態にあるので、この活力が漸次にその度を減ずるに従って肉体は静止してその各部分を容易に認識し得べきに至り、観者に何ら神秘の感情を起こさしめないのである。遂には全く活動を停止したる死屍となつてしまふ。生死は生活力の度によるもので、死屍に対して肉体の感を強くするものゆえ、

生活力の乏しい時は肉体的で、生活力の盛んなる時は精神的と云つてよい。

現代の文明なるものは死屍の堆積を作りつゝあるものである。自然科学の発達によって極端に物質的の、すなわち生活力を度外したる物質、無生物に対する研究および応用が著しく発展し来り、その結果たる現代文明の施設の殆んど一切は、無生物の優勢を来して人間は自然に征服せられてしまおうとして居る。人間内心に直接関係なき外在的力のために支配せられて居る。無形なる、神秘なる生活力を有せるものよりも、生活力を欠ける有形、有限なる材料を得るを目的とするに至つた。物質はもちろん必要であるけれども、これは生の発展の材料となり、内容となるがために必要なので、間接なる方便にすぎない。直接なる目的は生の発展である。

現代文明に於いては方便のみを過重し、この材料、物質のためにかえて生の発展を妨げて居る。人間の生活力に適當なる程度に於いてのみ求むべき物質を、生活力以上に、すなわちその生活力を以てしては到底これを支配すべからざるまでに間接、有形の物質を要求するので、食傷を以て半死の情態を現するのである。故に智識、衣食住の設備の如きは、その過度なる施設のため全く人心が支配すべき物質に、反対にこれに支配せらるゝの滑稽

を演じて居る。これは不自然であつて、芸術家がこの不自然に対する意識的または無意識的の反抗を有するのが文芸が極端に流るゝ原因である。一種の破壊的勢力となるのである。ゆえにこの物質を破壊することは、更にこれを完全なる統一融合に導く所以である。破壊、忘却という如き消極的情態を要求して、こゝに始めて人間の生の真意義を發見するのである。飲酒はこの意味に於いて一種の意義を有するのである。五感の機能を遲鈍ならしむるときは始めて内心の本能が活動し来り、無意識、無自覚の境に入つて、眞の意味に於ける自然に帰るのである。面識なき人といえども直ちに話し合うべきが自然である。けれども外在的關係を自覚せる間は、人をして人心本来の要求に従つて活動するを許さない。ゆえに飲酒の結果はかくの如き外在的關係を打破するのである。實際の如きが全く機械的に走るときに、飲酒の結果はいわゆる胸襟を開いて相語るを得せしむるので、こゝに肉体、物質を破壊することによって更に力ある新生命を生むのである。破壊は生命の母である。また恋愛の場合に於いては飲酒はその感情の發展を助長せしむるものである。外的制限を破壊して人間本来の能力を自由に活躍せしむるのである。飲酒に弊害のともなうは、一般に認むるところにして、禁酒運動の如きも一面の真理を有するけれども到底実行すること

はできぬ。それは飲酒は人間生存の目的、生の発展に貢献するものである故である。酒の健康に及ぼす影響のごときも実験の結果は必ずしも一部禁酒論者の、間接なる、物質的、部分的現象に執着しての偏せる計算を以てしたるものを信すべきではないと思う。酒は物質に対する精神の代表となつて居るのである。印度、ギリシヤに酒神の名が存する如く、飲酒は到底避くべからざる事実であり、また酒は必要のものである。

自殺は飲酒による肉体の破壊を極端に運んだものにすぎぬ。外在的物質的關係の圧迫、義理、負債、恋愛の障碍、成功の挫折のごとき場合に於いてこの外的圧迫はついにその人を驅つて一度に全体の破壊を以てこれを脱するので一種の勝利である。破壊を以て勝利を得むとするのである。この勝利の感じは、情死および怨死の場合に於いて最もよく実現せらるゝものである。死は人間の最后必勝の武器である。自ら殺し得るは人間無上の権力である。愛が打ち勝つべからざる如く、死もまた打ち勝つべからざるものである。

×

×

宗教の信仰に入るものは自殺を企てたものが随分多い。これは動かすべからざる事実である。この一事實は宗教的信仰の如何なるものなるかを暗示することが出来ると思う。元

来理解は自己の実験を喚起するの謂であつて、自己の実験以外のことは理解はできぬ。それゆえ近世的、物質的文化の感化により成長したる吾々の経験を以てしては古代の天才の経験はうかゞうことは出来ぬ。理解することはできぬ。ゆえに吾々が古代の天才に対してこれを理解しようと思うならば、自己の過去の智識を捨て去らねばならぬ。そうして新たなる経験を、新らしき世界に出でねばならぬ。常に新たなる世界を発見せむとするのが天才の常で、五感が新たに活動し来る心機の転ずるところを表現したものが最勝の芸術である。飲酒および自殺が決して浅薄なる功利論者の説の如く、無意義のものでないということを経験する時、はじめで宗教に対する第一歩を進めた時である。

酒類のごときも畢竟するに物質にすぎぬ。有形、有限のものである。程度の問題、方便の問題である。徹底的のものではない。いわゆる低徊趣味たるを免れぬ。量を過すときは却って生活力を滅却するに至るのである。中庸を以て満足するものにとってのみ酒類は許容すべきである。中庸とは平凡、尋常のことである。飲酒の刺戟すなわち酒類の破壊力の如きは程度の弱いものである。徹底せざる、部分的のもので、一度に全体を破壊し得るものではない。部分的のものにすぎぬ。これを堆積するときは又一種の圧迫になり、嘔吐の

原因になり、他のリフレッシュメントを要求する原因となるのである。故に飲酒は万人の自然に要求するところのものであるけれども、人間本来の能力を徹底的に満足せしむるものではない。飲酒の要求に代うべきものは宗教的情緒である。飲酒が一般人の要求なる如く、宗教的情緒もまた一般人の要求するものである。宗教的情緒を民族心理の見地より研究し論ずることはかゝる論文に於いては不可能であるけれども、この宗教的情緒は人心必然の要求を満たすため、人間本来の能力を發展せしむるために各人の要求するものであって、有限有形の部分的世界を破壊し、新たな融合のもとに統一せむとするものである。一種の絶対的、徹底的の生の發展をなさむとするものである。新たな生に入り、いわゆる復活を以て再び少年の清きを得むとする本元に対する憧憬である。祖国、郷土、家族に対する追慕および恋愛はこの憧憬の感情を分類、分解し、或いは客観化したる時の命名である。かくの如きは宗教的情緒の実世間的に客観化せられたる、すなわち実世間にその情緒に対する対象を見出したるのである。宗教的情緒は本来の意義に於いて決して天上界のことのみを云うべきではない。宗教の發展が漸次客観化する傾向を有すべくして、若しこの客観化を不可能とする宗教の如きは到底将来に生存の望みなきものである。この宗教信仰

念の客観化は親鸞聖人の他力本願の信仰に於いてその頂点に達して居る。宗教の客観化とは宗教信念がその対象を實世間に見出すのである。すなわち実験的になるのである。

されどこゝに最も注意すべきは、この宗教的信念の客観化は、こゝに止まるときは宗教としての意義を没するのであって、客観化せられ、実験的になり、内容が充実に平行してその宗教的、超越的、出世間的情緒が力強く、真実に、新鮮に活動し来るところに真意義を見出すのである。この宗教的情緒は、實世間の真相に触るれば触るゝほどその絶対的、無限的、永久的、神秘的の力を得来るので、決して有限的、比較的の空虚と飽饜との中間を動揺するときものではない。生死の両端を横超するものである。宗教的情緒の特色は精神的革命に存するのである。宗教は人生全体の問題である。生死の根本問題である。故に宗教的信仰は徹底的なることに特色を存するので、生活の極度の發展の結果は殆んど死の威力をもって雑念を一掃するのである。飲酒より一層極端に走せたる自殺と同様の威力を有するのである。外的圧迫に対する自殺は畢竟するに物質的圧迫に対して物質的破壊を以てしたのである。この時に當って宗教的信仰は異常なる意志力の発動を以てこの外的圧迫を破り、こゝに救済の實を挙ぐるのである。この意志力なるものは一切の存在をその

根源的要素に帰着せしめて簡單化するときには生ずるものである。この根源的要素なる補充概念の解明はいわゆる信案開発の實驗の内容そのものを以てせねばならぬので、一種の補充概念として残しておく外はない。今は単に自殺を企て、圧迫を脱せむとせしものが、宗教的信仰によって救われたる實例の多きことを云うに止めておく。宗教的信仰は不可思議なる意志力の開展である。この意志力を以て外在的、物質的圧迫を破壊するとき、徹底せる解脱を得て眞の自由を得るのである。意志力は物質的文明を簡單化するものである。多様の種別を融合せしめ、統一して、唯一の根柢に帰着せしむるものである。ゆえに吾々は現代文明に対して宗教的信仰を以て、殊に宗教的の「行」を實行してこの物質的文明の圧迫を解脱するのみならず、更にこの物質的文明をして意義あるものたらしめ、材料と方便とを以て材料方便に止まらしめず、直ちにこれを最終唯一の目的に適せしめねばならぬ。吾々は無常の大海に迷惑せずには必ず眞実の目的に到達せむとするのである。

歌は抒情詩であるべきが本来であるから、眞の詩人でなくては作れぬ。俳句、小説などは余程性質が異つて居る。和歌の内容は人格それ自身に外ならぬのでいわゆる材料というものは和歌では重要ではない。和歌は決して他を模倣し得べきものでない。和歌の眞生命はこゝに存するのである。この人格は和歌の調子すなわち節奏となつて表現せらるゝのである。和歌が節奏を重んぜねばならぬのはこの故である。ゲーテは詩聖である。詩聖である所以は彼が大なる抒情詩人である故である。ゲーテは思想家、哲学者、科学者として偉大なのではない。彼が古今独歩の大詩人であるのは、彼が抒情詩人であるからである。ゲーテの如きはその抒情詩が直ちに哲学にまた宗教になつて居るのである。抒情詩は一切の文学の出発点であるのは万人の認むるところであるけれども、同時に一切の文学の終極点であることは氣付かぬものがある。しかし抒情詩は既存の形式の反復を以て模倣と創作とを誤認する物好きのために常に腐敗に導かるゝのである。けれども抒情詩はすべての民

族が一切の時に於いて有する唯一の元來の詩形であつて、恋愛と自然に対する感情とを主なる内容として、殊に同一の句を反復する咒文、すなわち自然を征服せむとする人間意志の自發で、宗教的情操の源泉である。こう思つて現代の歌を見ると歌人の愚なことには驚かざるを得ない。たゞ新らしいような事を云つてのみである。

——
抒情詩について　・ 5 ・ アカネ　——

○
現代の人は一部分に執着して一時的現象をのみ觀察して居る。物質というものは全く時間の觀念を抽象し去つたもので、部分的の、一時的のもの、いわゆるつまらぬものだ。これが現代人の追求の唯一の目的物である。

化粧の如きは人間を物質化する手段である。全体として統一して居る人間を、部分々に切斷しようとするのである。一部分々々々々を目立つようにする。顔だけ白く塗り、唇を赤くするとき、みな一部分を目立たしむるので、人間としてよりも、物質として取扱う

に都合よくするのである。家庭の人として交際するときには、互いに人間としてその精神的方面を主として認めるのである。それゆえこの反対に、単に物質として人を取扱わむとする要求のために花柳趣味が行わるゝのである。現代の小説の多数はこの人間を物質化し、一部分を目立つように細叙したものにすぎぬ。

吾々は物質を排するのではない。物質すなわち部分的存在を統一せしめ、融合せしめむとするのである。それには存在の意志を断絶せしめねばならぬ。生きるのは死に近づくこと、すなわち死ぬことである。全体を分解するのである。一切の生欲の結果は必ず弛緩の失望に終るのはこの故である。緊張ののちには弛緩、興奮ののちには沈静、欲楽ののちには悲哀、快ののちには不快が来るのが自然である。人生の問題を終局まで押しつめると生死の問題になる。生に執着するの、死を恐るゝの、一方面、一部分を見るのに過ぎぬ。生を感じるとき死を思い、死に迫ったとき生を感じるところに文学の理想がある。生と死とを同一化するのである。これは宇宙の意志を直覚する時、すなわち三昧の神力を以て一処、一念、一時に自己を宇宙に遍満せしむる時、すなわち生の瞬間的全体發展の実験を以てする、すなわち生死の境いに入出し、骨髓に徹入する感激を実験するのである。こゝに

はじめて常倫を超出した文芸が生るゝのである。

存在の意志を断絶するというのは、不完全の云い方である。詳しくは、生に在って死を
実験することである。これは臨終に生を実験する唯一の方法である。自然は苦惱、愁嘆、
虚妄、障碍に満ちて居る。自然の真を洞察することは生きつゝ死を味わうことである。自
然主義の秘訣はこゝにある。

—— 偶 感 ・ 5 ・ アカネ ——

○

詩歌の生命はそが人生全体の反映なることに存す。人間の要求は全体を理想とす。故に
人間の活動は一層完全なる情態の希求に基く。しかして人間がその理想境を自己中心に見
出さむとするときに生るゝものは詩歌なり。すなわち吾人は全体の感情を一点に集中せむ
とするなり。

人生の迷いは感情の区分に基くものなり。吾人が全体感情を動かし得るに至らばこれを

悟りと名づくべし。詩歌に於いては、作者も読者も全体感情を働かすの快感を得るを理想とす。故に詩歌の主なる、又は根柢の内容は男女の恋愛なり。恋愛は全体感情を働かす点に於いて人生活動の諸現象中、最も模範的のものなればなり。詩歌が内容および形式の統一緊密を要求し、散漫冗長を忌む所以もまたこの全体感情の表現たむがためなり。

故に詩歌を論じ、又は詩歌を作らむとするものはこの全体感情を働かせたる実験を人生の上より直接に、或いは内心の静観によりなしたる人ならざるべからず。吾人は吾人の感情全体を働かすことによつてはじめて人生の真相を認め得べし。故に詩歌が物質文明のあらゆる勢力を超絶してその威厳を保持しつゝある所以は、他の人生上の活動よりも詩歌を作り又は味わうことの人間生存の目的に適いたればなり。詩歌のこの根本的特質は詩歌をして小宇宙たらしむるものなり。故に上代に於いて人間は比較的詩歌に縁ありたるは、その生活情態の比較的簡單にして自己存在を自覚し、人生および宇宙を統一して認識するに外部よりの障碍少なかりし故なり。されども近世に及んでは人生は漸次複雑を加え、人々は外よりの強迫により、機械的に働き、社会的団体生活を営み、何らの自覚もなく死するなり。この複雑なる社会情態にありてこれに感化せられざるのみならず、この複雑なる社

会情態の真相を齟齬し、外部に現われたる複雑を自己内心中に簡單化し、人間本来の真面目を發揮するの行動をなすものを天才となすなり。同様に國民としては外来の刺戟に屈せずしてむしろ為に醒覺し、國民的自覺を有せる時にしてはじめて眞の詩歌を得べし。外来の文化に眩惑せるあいだは眞の詩歌は生れず。この点に於いて詩人は國民性の權化たらざるべからず。教育せられ經驗を積みたる國民は小兒たらざるべからず。

故に詩人は個人としては戀愛を、國民としては本国を憧憬の対象とせざるべからず。故に詩歌研究は國民全体のあらゆる方面の運動を知るに非ざれば完全に非ず。

.....

抒情詩的和歌は渾然たる思想を最も直接に表現せるを以て、含蓄多く詩歌としての価値より云うときはこれを第一に置かざるべからず。文学として感情の純粹にして形式の完備せる短詩形にして主觀的方面と客觀的方面とを代表するものは抒情詩的短歌と俳句なり。

人間思想の複雑を加うるに従い、抒情詩的和歌が叙景的、思想的の二方面に發展するは自然なり。されども詩歌の主たる内容たるべきは人間精神生活全体にして、決して外界現象にあらず。故に吾人の思想感情を余りに客觀化し、また分解するときはその芸術的価値を

失うに至るべし。

されど吾人の思想感情に客観的内容を与え、直覚的会得をなさしむるには必ず客観的対象と哲学的反省とを求めざるべからず。故にこの点に於いて和歌および俳句は詩歌の二要素にして、和歌発展の径路またこの二要素を暗示するものなり。しかしてこの二要素を結合し、客観的確實を有し、造形美術に於ける如く直覚的に会得せられ、内容豊富にして変化あり、深遠なる思想の底に熱烈なる感情の躍動するとき後世の理想的詩歌を得むとするには必ずその要素たるべき和歌俳句の研究をなさざるべからず。また日本国民が日本語を以て日本国民の思想感情を主として歌いたる万葉集の研究より始むるに非ざれば他の詩歌研究は今日の日本人にとりては無意義なり。日本人として詩歌文学を研究せむとして日本の詩歌文学の研究を研究の根本におかざる如きはその愚笑うべし。

— 万葉集の研究に就いて —
・ 6 ・ アカネ —

文芸と人生

将来に於ける文芸と宗教

子規独歩二葉亭の生活

二葉亭の作は「平凡」を読んだのみである。その他有名の作および翻譯は一つも見ぬ。またその生活については何も知らぬ。これは殊に二葉亭の作に就いてのみではなく、紅葉、露伴、逍遙らの作も一つも見ぬ。それゆえ小説家としての二葉亭を論ずることは出来ぬが「平凡」は傑作であると思う。いま二葉亭について云わむとするのは文芸と人生との関係である。

二葉亭は明治小説界の大家であつて、渡歐の際、文芸は男子一生の事業にあらず云々と宣言し、また平生文学者と云わるゝのを厭うたという。かゝる言をなしたのは二葉亭がいわゆる文学者であつた故であらう。空想家の言である。理想家の言である。或いは文学の真意義を知らなかつた故の言であらう。実業、政治などの方面に活動して、最高の幸福を得らるゝと思つて居るのは迷想にすぎぬ。文芸は人生を無常なりと観ずるところに根柢を有して居る。人生は生死の稠林、愛欲の広海である。人生を真に楽郷と観ずる如きは幼稚、

無能力にして敏感を欠いた人間である。この愁嘆、苦惱の人生から解脱する稀有の場合に文芸が生るゝのである。真の文芸は精進の結果でなくてはならぬ。努力なき濫作のごときは真の文芸ではない。かゝる文学は男子一生の事業ではない。文芸は無価値であるから、人生に活動せよというのは、かゝる似而非なる職業的文芸を文芸の全体としての結論である。

吾々は文学は男子一生の事業ではないから実世間に活動すべしと云うよりも、真の文芸を得むために実世間に活動せよと云おうと思う。文芸は実生活そのものではない。実生活の結果である。実生活の活動は部分の問題である。部分は利害の問題である。比較の問題である。数量の問題である。自己と他との問題ではなく、他と他と相互の問題である。このとき、ひとたび自己とは何ぞやという疑問が起こったとき、文芸が生まるゝのである。一切の現象を統一するものは自己である。人間である。三界雑生の火宅に於いて自己存在の真意義に気付くときに文芸が生まるゝのである。

俗人より見て非常識となし、或いは悲惨なりとなす生活も、芸術家自身にとってはその外見のごとく盲動して悲惨に陥ったのではない。貧に堪え得るが故に貧に安んじ、孤独

に堪え得るが故に孤独に安んじて居るのである。自己に価値があり、力がある故に、他の方便を求めないのである。実生活の苦悶の闇黒裡に一道の光明が輝いてきた時に芸術が生まるゝのである。生まれた芸術の内容は現世の悲哀、罪惡そのものゝみであるが、作者の心持ちは愛欲の緊念思惟から解脱した勝利の感である。芸術作品は、作者の解脱に至る実験のプロセスの表現であつて、それが統一的効果は評論の範圍外である。これは「解脱」なる宗教の補充概念をもつて人心全体の默契を暗示するのである。部分的に見たる作物の内容は。それを統一したる作者の心持ち全体とはコントラストをなして居るところに直接実験の価値が存して居る。一切の心的現象は、連続せる径路の關係を認むるのみならず、それが強さの極限に於ける対照の両面を洞察する觀念および情緒の融合を以て興奮緊張せる意識に統一せらるゝとき、はじめて眞の芸術が生まるゝのである。極限の緊張は極限の弛緩すなわち解脱によつて継承せらるゝので、その間髪を容れざる過度の一瞬を客観化したものが調和の色形であつて、極限の興奮に至る径路の動揺を客観化したものが節奏の音調である。

近世は神秘の時代ではない。予言者の時代ではない。芸術と対立すべき宗教の生命を保

ち得べき時代ではない。近世人は、自我感情を保ち得べき孤独より都市の団体的生活に駆逐せられた。過去に於いては宗教は伝説によって個人の胸中にそれが本質を生かして居った。そうしてこの自覚の寂寥より救うために芸術が存して居った。芸術は宗教の補充であった。人生に変化と複雑とを与える任意にして偶然的の現象であった。近世科学の発達は、宗教の神秘を奪うと同時に、芸術の独立を促して来た。現実的、写實的、實驗的傾向は芸術のための芸術主義、自然主義等の運動となつて、時代に相応せざる旧芸術の破壊と同時に、新芸術建設の努力となつて活躍した。

過去の芸術は、芸術的快活を保つて居った。智的であつた。高められたる自我感情の所産であつた。觀念の遊戲的結合にもなる感情の同時的融合の軽快なる調和であつた。外形の整頓を以て理智の明快を示して居った。近世の芸術は五感に直接な表情と活躍せる印象とを以てその常態を變形し、読者觀者をして面を掩わしむるものがある。すなわち軽快の情趣を失なつて陰鬱なる宗教的情緒の悲哀をともなうて来た。主我的より没我的になつて来た。日本に於いて子規、独歩、二葉亭の如きは、徳川時代よりの文芸に対して新文芸建設に努力した先覚者、先驅者であつたけれども、建設に先だつ改革のために一生を費し

てしまった。

近世の文学は醒めたる者に与うる酒ではなく、酔いたる者に与うる水でなければならぬ。娯楽ではない、覚醒でなければならぬ。自然の観察はこれを統一すべき自己覚醒の方便でなければならぬ。自然を闡明し、統一する強烈なる意志力を以て唯一の情調に融和せられたる自然を表現せねばならぬ。幼稚無気力なる幼年および老年者に、微弱なる刺戟を与うる戯作者流の遊戯的空想文学ではなく、人生の真相に触れ、利害の実生活に苦斗する有為の青年の感情を一洗する深刻な文学でなければならぬ。この意味に於いて、現在自然主義の主張は最も進歩したものである。空想低徊のユーモリストおよび紅葉一派の戯作者、露伴、洪柿園らの空想文学者の如きは過去文芸の残骸にすぎない。

文芸は理論の問題ではない、實際の問題である。作者の生活と関連せる問題である。主義主張は事実の説明にすぎない。子規、独歩、二葉亭みな新らしき文芸を建設せむとしつゝも、実世間的活動は彼らに対する誘惑であつた。病苦に呻吟しつゝ文芸に生命を見出したる子規の晩年はともかく、独歩においても理想は空腹を癒すべからずと云い、二葉亭の国際関係を念とせる如き、みな理想の空虚を捨て、現実の充実に生命を見出さむとしつゝ、

現実の圧迫によって病死するの不幸に遭遇したのである。

然らば現代文明の複雑を統一し、簡單化するという意義は如何。哲学的冥想に耽るのもない。百科の学に通曉するでもない。富財の力によって達し得べき一切の設備を完成することでもない。人生の実経験に頼るのである。一切の経験に対して優勢たるべき稀有最勝の実験を得るのである。興奮緊張の極、生死を超越したる感激に達するのである。如何にしてこの境に達すべきか。

現代に於いては日本に於いて發展せる仏教經典は、文芸に従事する活動せる感覺を有する人々に顧みられずに僅少の敬虔なる僧侶のほか、枯木死灰のごとき敏感なき僧侶および架空的談理に夢遊せる哲学者の玩弄物となつてしまつた。個人現在瞬間の感情は価値の根柢である。けれども人生は変化そのものである。各瞬間に臨終の悲哀を経験しつゝあるものである。人類發生以来、人類の経験に類名を附すべくんばそれは悲哀の経験である。古來幾多の天才が一切の補充的、附加的経験を脱却し、眞実本来の経験の力と熱とを吾々に伝ふるものは芸術の作品と宗教の文書とである。芸術作品は現代芸術作家、批評家の願慮するところであるけれども、宗教文書は殆んど顧みられぬ。人生は連続の一部である。現在

は過去によって限定せらるゝと同時に、将来によって生命の意義を活躍せしむるのである。過去の束縛と、現在の無常と、将来の希望とを観ずるその標準は主観である。この自我覚醒の結果は芸術で、努力は宗教であった。この宗教と芸術との過去の差別を現在に滅して、将来に真生命を伝えむとせるはわが國に於いても梁川、樗牛らにその例を見出し得るといっても、彼らは内的実験の告白たる信念の莊嚴を、単に個々の外的關係として観察し、円融無礙、没我の境に到らずして、自覚的努力によって信念を建設せむとした。故にその言行はついに虚飾の技巧によっての曇りを去らなかつた。何が故に然りしか。この問題は独歩、二葉亭らの死をも解決し得べきである。

一は彼らの天稟の性が然らしめたと同時に、彼らの実験が幽冥を炎照すべき光明を欠いて居った故である。他一切の雜念を滅尽せしむる強きを有する唯一殊妙の実験を欠いて居った故である。無量、無辺、無碍、無對、不斷、難思の光明に浴して三垢消滅、身意柔軟の悦樂を実験し得なかつた故である。現実を避けて、半死の情態にあって快活なれども微弱なる遊戲的態度の自由境に安んずることも出来ず、さりとて現世虚仮の名聞利養を捨つることも出来なかつた。殊に些末の学識に循々として出沒し、これを脱出することが出

来なかつたのは、彼らをして真に宗教的信念の真髓に到達するを妨げたのである。

現在は過去によって制限せらるゝものである。故に吾人の祖先が捨身求道の熱誠の威力を受けて自己の現在に難思の光明を投ぜねばならぬ。現前の表面を観察すると同時に裏面の不可思議に驚嘆せねばならぬ。過去と現在とを分つ標準は自己である。自覚とは祖先の威力と宇宙の意志とに対する自己の關係を意識することである。宗教的經典の誦呪と雑念を一掃する静観三昧の工夫とを以て得來りたる智力の高明と感情の微妙とを以て実世間に処し、雑毒、煩惱、虚仮、邪偽のあいだに唯一の優勢なる実験を得來らねばならぬ。同一の勢力を有せる実験の堆積は徒らに吾々を迷惑に導くのみである。強さを有せざる無数の実験よりも、一回にても強烈深刻の実験を得るをつとめねばならぬ。他一切を捨て、この唯一不二の実験を希求せねばならぬ。人生の意義を一所、一念、一時に結晶せしめたる実験を得ねばならぬ。これは人心元來の本質の覚醒であつて、過去に於いては伝説は人心をしてこの本質を覚醒せしめたけれども、現代に於いてはこの深遠の經驗を客觀的確實を以て表現せねばならぬ。これが現代および將來の文芸の使命である。

子規、独歩、二葉亭三人は文学史上各別の地位を占むるものであろうけれども、中途に

病いに倒れたる先覚者としてこれを觀察するに、その事業および作物は当時超群の傑作であつたに拘らず、その欠陥は思想の欠乏と没我的涅槃の裏面に一閃し来る宗教的情熱の欠乏に存するのである。明治に於ける一般の新文学の運動はその終極の發展は人格の力を以て東西過去の思想および現在の思想を統一したる深さと力とを有する文芸を以てせねばならぬ。現代自然派の作物も同様の強さの足らぬ作を並列するのみであつて、このまゝ進まば矢張り人生を賑やかすに過ぎぬ戯作者流の弊をくり返すであらう。殊に荷風氏の「祝盃」と称する如き作は、現代に対する諷刺の意があるとしても畢竟つまらぬ作であつて、その作の効果に何らの強さがないから、作中の卑猥な記述が読者に悪感を起こさしむるほか何の能もない。また写生文派の虚子氏は「続俳諧師」に於いて人生表面の雑多の事実を心中の感想を以て貫かむとして俳諧趣味の哲学を説いて居る。この傾向は喜ぶべきであるけれども、いわゆる俳諧趣味は過去のものであると信ずる。そのほか一般の批評家および作家の吾々を刺戟する評論および作物に接しない。けれども一般の新文芸建設に対する努力は十分に認めらるる。最後に、吾々は自己を顧みるとき、修養と経験とに於いて前途の遠きを思うと同時に人生の緊縛が刻一刻に身に迫るを切實に感ずるのである。

○
動ける生活の根柢

意義ある生活とは憧憬を有する生活である。讚嘆の情を有する生活である。自己以外に自己の存在の意義を強むる対象を有する生活である。自信、自重、自覚と云い、それが自己現在の所有に安住しての自信、自重、自覚であれば、吾々はかくの如き安心をば排斥するのである。

吾々は憧憬讚嘆の生活を欲するのである。波瀾動揺の生活を欲し、求道向上の生活を欲するのである。静止するものは障碍である。罪悪である。この罪悪を破って新生命を得むとするのである。

風景画が必ず雲霧、風雨、人物、禽獣、船舶などを配合するのは、動揺するものによって自然の寂靜に威厳あらしめむとする故である。他を敬愛することによって得る幸福は五

感の享樂によつて得る幸福よりも強い。こゝが吾々の現代文壇に対して無經驗ながらも何らかの主張を述べむとする根柢である。吾々はこの点に於いて理想派の空虚と混同せらるゝと同時に、個人的利害に執着せる流俗とも混同せらるゝのである。現実の光景に接して瞑目するのは、受けたる印象の複雑を胸裡に統一せむがためである。吾々は現実の活動を避けむとするのではない。吾々が執着の昏迷に身を投ずるのは、卑湿の地に清淨の華を求めむとする故である。かくの如き表面の矛盾を内面の眞実に於いて統一するものは吾々の意志である。意志とは憧憬の發動である。差別の破壊者である。この意志力發現は客觀的内容を有する芸術作品によつて現わすと同時に、事實の直接なる觀察より抽象したるプリシンプルによつて説明し得るのである。統一的組織は各要素の單なる和(Σ)ではなく。各要素の変形すなわち死によりての新生命發生の動亂である。創作的綜合である。この動亂と共鳴する内心の活動を意志と名づくるのである。人間の創作的意志力を感得する時はじめて価値および目的の統一的觀念に到着するので、吾々の生活の根柢、信念の根柢はこゝに存して居る。技巧と信念との絶つべからざる關係もまたこゝにかゝつて居るのである。各要素の目的が全体の目的と合一し、こゝに技巧と信念との一致、現実と理想、部

分と全体との一致を実現し、部分によって全体を暗示せらるゝとき、神秘を感じ、全体が部分に融け込むときに力を感じるのである。技巧の点に於いて簡明を尊び、明瞭と明白とを要求し、配合、仕組、構図などを論ずるのはみな分解の結果である。各要素の關係、比較を論ずるので、今日無解決と云い、客觀的態度と云うまたみな分解の結果について云うので、この分解的技巧と綜合的信念とを一致せしめむとするのが吾々の主張である。現時文壇の一派が排技巧と云いつゝこの分解的の技巧の方面から進んで内容の充実を以て真実を得むとする出発点に対する態度はたしかに勝利的である。文芸革新会およびその他の人々の態度は盲動に陥るおそれがある。天才を模倣する常人の行動は盲動である。

技巧が明白明瞭を求むる以上に主觀的現象の無常迅速なるを自覚するにともなう興奮、沈静、緊張、弛緩の繼起的対照によって要素を強めること、すなわち技巧より発して創作的綜合に達するには、その終極として生死の二つをとってこれが対照によって強められたる觀念感情の組織を表現しなければならぬ。生死の問題に達したるとき文芸は宗教を包括せむとするのである。

快樂に次ぐに憂苦を以てし、興奮に次ぐに沈静を以てするは人生の真相と存じ候。宇宙はつねに動揺し、変化し、開展しつゝあるものと存じ候。人生は無常に候。無常なる人生の波にしたがう外これなく候。かくてその風波に任せ候ところに宇宙と渾然融合するの境これあり申すべく、動ける地上に静止を夢想候は小我見に没する故と存じ候。無常の人生に於いて宇宙の無極を暗示するものは人間の意志力に候。

意志力の発動は墓あるところに復活を見出し申候。意志力は生死の両端を結合するものに候。人生の真意義はこの意志力の無極の開展により人間意識の極限を越ゆるの境に入るを理想と致すべく候。詩はこゝに生まれ候。愛は永久の生命を生き候。

死は生を思うによってその憂苦の感を与え候。生は死を思うによって無上の価値を生じ候。詩と愛とは創作の力に候と同時に、破壊呪咀の力に候。一面は伝来固定の道德律によれば悪と評価せらるべきに身を投ぜざるべからざる所以に候。泥中の人を救わむには身ま

た泥中に入らざるべからず候。無為高踏の無氣力に終らむは小生らの願いには之なく候。外部の種類、名目を以て最後の標準とせず、内心の真実すなわち力と熱とを以て活動そのものに生命を見出し、倏忽の人生をして悠久の生命に触るゝあらしめむは小生らの至願候。

— 消 息 —
・ 7 ・ アカネ —

○
芸術家の目に映ずる人生は勝利者の目に映ずる生命と希望とに満ちたる若き人生でなければならぬ。芸術家は征服者でなければならぬ。芸術家は自己に対しても征服者でなければならぬ。すなわち一面禁欲を實行し、忍辱を實行せねばならぬ。俗世間を遠離するところがなければならぬ。常に新たなる泉はこゝに湧くのである。死により、棄却によって永久の生命を得ねばならぬ。

芸術の究極は神秘であり、不可解でなければならぬ。妙宝を有するものは必ずこれを秘

せむとする。光を生むものは闇である。

自然は無極である。無極の意識は刹那の意識の裏面に閃くものである。自然主義の極致は人生の大海に身を投じて、その風波に身を任すところに存している。

………

経験は唯一の權威である。けれども芸術に於いては経験の分量を重んじ、単に経験の堆積を作るに目的を存しては居らぬ。むしろこの経験は経験を破壊するために必要である。知識は知識の無益なるを悟らしむるがため、すなわち知識を破壊せむがために必要である。単に自己の経験と知識の分量を他に誇示せむとし、また個々の経験に価値をおき、分解分析の態度に止まり、統一綜合の能動的態度に出でぬならば、何処に人生の価値を見出すべきであらうか。

吾々は空虚なる託宣の如き価値判断および規範の開展を求めむとするのではない。必ず直接の実経験を出発点とせむとして居る。けれども個々の経験を静止固定せしめ、分離散在せしめむとするのではない。必ずこれを唯一の情調のもとに統一せむとするのである。統一とは個々の経験が唯一の方向に対し運動に置かるゝの謂である。この境を客観化すれ

ば宇宙の動乱である。無常の人生である。その主観的実在は意志力の開展である。

信念の対象は全存在であり、全経験である。量の問題ではない、質の問題である。相對の問題ではない。無条件、絶対の問題である。思議、言説の範圍外である。こゝに於いて吾々はいわゆる審美感情の意義を見出し、芸術の真意義を思うのである。芸術の内容は実人生そのものである。実人生の官覚、感情およびその合成は芸術の内容たり得ると同時に、それは統一せられたるものとして唯一の情調のもとに、いわゆる審美感情によって運ばれねばならぬ。

個々の経験を唯一の情調のもとに統一せむとする時、その主観的方面の修養に於いて宗教的信念の実験を以てすると同時に、技巧の客観的方面の修養に於いて日本文学史の中心を貫く和歌俳句の研究製作を以てせむとするのが吾々の理想である。小説を作るために和歌俳句を捨てねばならぬというのは、その小説、広くはその文芸が墮落した確証である。

○

自己の苦痛は、同時に民衆の苦痛を思わしむる。こゝに社会的救済者たる革命的精神が生れる。彼は煩雜の敵である。彼は僅少なるものを、さりながらこの僅少なるものを根本的に研究する。そうして各人に自然に備わって居る力を開発し、解放し、活気づける。子規先生は、明治文壇に於いて最も顕著なる革命的精神である。一切の人事は彼の興味を惹く。けれども、それは方便としてある。最後唯一の目的は人生そのものである。故にその同胞は、幸福なる少数者ではなく、外的圧迫より脱せむと努力する国民の大多数である。けれども偉大なる精神は一時的流行によって伝えらるゝものではない。必ず長き時間を要する。

流行するものは最上のものでなく、最下のものでなく、必ず中庸平凡のものである。流行することによって平凡のものを最上と誤認し、流行せざることによって最上のもものを最下のもと混同するのが一般公衆および一般公衆の娯楽の対象たるいわゆる有名の人々で

ある。偉大なる精神は一時的流行によって多数の同情者を得るのではない。その永久の生命によって長き時間を通じて多数の同情者を得るのである。

.....

眞の芸術家および詩人が他と異なるのは模倣によらざる自己特有の情調を有するや否やにある。抒情詩を有するか否かである。竹風が紅葉と子規とを同じに論ずるのは子規を理解せざるが故である。詩を理解せざるが故である。ハウプトマンの技巧的の句とゲーテの力ある句とを並べて引用するのもこの故である。ゲーテの句は一語々々に力がある。ハウプトマンの句には少しも語勢がない。技巧により、模倣によって補綴した古手の思想である。高山樗牛がハイネの詩を賞して居ったなども幼稚のものである。万葉集を有する日本人にとってはハイネの如きはむしろ平凡浅薄のものにすぎない。

性欲以外に人間なし、恋愛なしという如きは、手以外に人間なし、足以外に人間なしというと同じである。近代デカタン派の詩人の多数は精神教育を受けたる故に迷った人々である。教育を受けたる、されど徹底せざる教育を受けたる人々である。彼らの学識、智力は酔漢の手にある刃である。罪悪は刃の所為ではない。統御力の足らざる精神の所為であ

る。意志力がなく、外部の輪廓に低徊する感情に耽る人々の所為である。空想的な哲学者、文献学者の冗漫も、性欲一天張りの小説家の冗漫も、根柢は同じく遊戯的感情に耽ることに存して居る。いわゆる自然派と云い、いわゆる理想派という如き、みな主義の異同の結果ではなく、類似せる人格が異った境遇に置かれたに過ぎない。盲動の兵卒である。

—— 文 芸 雜 感 ・ 8 ・ 15 ・ 日本及日本人 ——

○

文芸は科学の初歩ではない。それが補充でなければならぬ。

.....

人生を理解し、これを探求するのは科学の任務である。芸術は人生を表現するものである。ゆえに芸術は単なる反映ではない。芸術的天才の直観によって振起せる理想の光によっての反映でなければならぬ。すなわち模写ではなく表現である。ゆえに芸術の対象は一般的実在ではなく、理想的のそれではなくてはならぬ。思考と直観との内的徹底に於いて成立す

編輯局諸兄

小生は富士山麓の精進湖に居り候。平和の愛すべき湖に候。湖畔は傾斜きわめて急にしてみづ／＼しく茂りおり候。山に囲まれ申し候。東の一方は青木が原を隔て、富士に相對し居り候。原の湖畔に尽くるところ水に浸さるゝ溶岩は美しく候。富士には雲のゆきき絶えず候。湖畔には数十戸の家あるのみにて静かに候。

始めて見る景色は心を惹き候。この初一瞥の印象をして最後の印象たらしめむを思ひ候。際涯なき海に対しては自己を忘れ申し候。されど局限せられたる湖上の光景に対しては自覚の寂寥を感じ申し候。自己にたより候とき、始めて生命を感じ申し候。

新鮮なる光景に接し過去の印象によって現在の印象を變形せしむべからざるをしみ／＼感じ申し候。

水にのぞむ松の緑を見ては太陽の光を思い候。されど下に湛うる水の青ずめるを見ては

地の力、死の力を思い、凄愴の感に打たれ候。自己の力を加うべからざる自然に向かつて始めて心の満つるを覚え候。棄却の欲喜に候。

湖畔に來りて始めて愛読の詩集をひもどくの氣力を得申し候。芸術は文化の序曲に候。芸術は青年と新興國民との所有に候。

数葉の写真お送り申し候。左に十六首の短歌、見るまゝをうたい候。静かなれども、動ける胸を満たさしむる湖畔の光景を彷彿せしむるを得むかと存じ候。

女坂峠にて

谷の間よふたがる雲は立ちのぼり尾のへを越えて棚びき落ちぬ
頂きにのぼれば見ゆる湖のへゆ吹きくる風になびく七草
新らしく目に立つ花の七くさを押し靡けつゝ吹き揺る穂すゝき

湖畔をありきて

たゞに向ふ富士の裾野の松原は雲ゆく下にうまいせりけり
水海の岸べを行けば木の間より波の音きこゆ風立つらしも
まさかゞみ澄める水ぎわの枯枝の水漬くありさま見るにさやけし

山かげにめぐり湛ふる水海の八十隈見ればかへり見せらる

目をあげて見るまもあらず立ちのぼる雲にかくれぬ富士の高嶺は

動くもの目につく雲の立つを見れば遠き神の世思ほゆるかも

かげろひの夕日けぶれる岸松はよるさゞ波に浮べる如し

松かげのたわゝ秋萩枝垂れ咲き風に散り浮くさゞ波のうへに

湖岸を行きもとほれば尾のへ立つ松吹く風は空仰がしむ

湖のへを高往く鳥の山を越え行くへ知らずも雲の八重垣

日のかゞやくみ空の雲を立ちかくし湖をくもらせ雨雲渡り来

暗き夜に火をあげて見む湖のへのともしきいほり人住まずけり

富士がねをめぐる水海三つ栗の中のうまし子精進の湖は

—— 精進湖畔より ・ 9 ・ 15 ・ 日本及日本人 ——

現代生活に於いて表面にあらわれたものはことごとく空虚に感ぜられてならない。吾々は隠れたる内部に将来の生命の萌芽を求めねばならぬ。それは信念である。わが力の全体を傾けたる着実の活動である。力はこゝにこもって居らねばならぬ。この意味に於いて労働を重んぜねばならぬ。単に現実の薄弱なる光彩を求めて居る幼稚な趣味から、いわゆる詩的信仰も生まれ、低徊趣味という如き文学が生まれ、日露戦役後の空想的な人心の盲動を助成したのである。故に過去、戯作文学の形見である漱石一派の遊戯的文学の創作評論、武士道などと称する空想的歴史小説およびこれに類する講談等はみな現代生活に於いて最も不生産的のものである。

— 文 芸 雜 感 ・ 10 ・ 1 ・ 日本及日本人 —

○ 文芸は人生の裏面である。こゝに文芸の意義が存して居る。表裏というは生起の経過に於いて互いにコントラストをなして居るのである。人生の悲哀の経験が文芸を生むのであ

る。悲哀を感じ得ることは力である。文芸は人生に触れ、科学、哲学、宗教と触れねばならぬ。

— 文芸 雑感 ・ 10 ・ 15 ・ 日本及日本人 —

○

内物経験と云うのは、外的経験に対していうのである。内的、外的というのは異った経験の範囲を示すのではなく、全経験を分解するに際しての二様の見地を示すのである。認識する主観が存在せずとも依然生起すべき諸相として経験を取扱うとき、これを外的経験と云い、吾らの経験を主観それ自身をも包括するものとして取扱うとき、これを内的経験というのである。内的、外的というは、主観的、客観的と云い、また直接的、間接的と云い、更に心理学的、科学的と云ってもよい。

従来濫用せられた主観、客観なる言辭は、自我と外物という如き皮相的意義に於いて使用せられて、二者を異りたる経験範囲のごとく思わしめている。それゆえ、文芸上の議論

の如きもこの仮定の上に立ったものはことごとく不得要領に終っている。故に、主観的、客観的と云う代りに内的、外的と云う言辞を用いるのは、これを同一経験に対する見地の差として理解するにやゝ適當である。文芸宗教に於いては、この内的経験がその主要なる内容である。人生に処して得たる個々の経験が、漸次に、或いは忽然と融合して、個々の感情が唯一の方向に發展して意志力の活動となる時に、その内的経験は信念に達したのである。而して文芸および宗教の極致は、この内的経験の強烈深刻なる力に存するのである。

.....

宗教は自己の問題である。宗教に対する積極的主張は自己内心の実験の告白をほかにして他一切は無意義である。宗教は求むる者にとつてのみ意義があるので、他より観察するという如きは無意義である。宗教は信すべきで、研究すべきではない。何なるかを理解探求すべきではなく、何なるかを披瀝告白すべきである。故に宗教を求むべくば外部的に現われたる社会的現象よりも直接人心の秘奥に活躍する信念にこれを求むべきである。名利と名聞を遠離したる内的生活すなわち人心必然の唯一真實なる自然の要求に顧みねばならぬ。人間生存の目的は自己を發揮することに存して居る。すなわち自己に適する他を求め

て、これを感化し、これと同化して、こゝに自己の胸に、また他の胸に無極の宇宙を見出すに至って始めて永久の生命を得るに至るのである。

人生は戦闘である。強烈なる戦闘は強烈なる生命を生ずるのである。破るべき圧迫が大なれば、得べき平和と自由もまた大である。肉身は破滅するも、こゝに永久生命の源泉が生まるゝのである。——内的経験——

.....

永井荷風の作に対してこれを喝采せる批評家こそ最も滑稽である。日本現代の文明を罵るその理由は、歐洲現代の文明の方が面白いからと云うのだ。かゝる浅薄のものを迎えて居る文壇は哀れむべきである。森林太郎氏の小説もまた遊戯的のものだ。同氏作短歌

物乞ふを跡より見れば門構へ大いなる家はよきて乞ひけり

の如き、たゞ噴飯すべきものである。この一首には何ら具象的感情的要素もない。作者特有の節奏もなく、情調もない。たゞかくの如き事実を概括報告したるに過ぎぬ。そういう事実を知らせるに止まって、その事実から得たる作者の心持は少しも分らぬ。けれども歌はこの内心の感動に生命を有して居る。かゝる事実に感動すべくば作者の心は余りに硬い

のであろう。長き発展の歴史を有し、この歴史的の特色とその詩形より来る必然的制限をも顧慮せず、かゝる歌を作って現代文壇の大家たり得るほどに一般思想界が沈滞して居るゆえに、元老や実業家の浅薄の人生観や処生術が流行して居るのである。現今、文壇も思想界もみな戦後の泰平の夢に酔うて居るのである。元老その他の過去の功名談や、凡小実業家の処生術の如きは、泰平の世には役立つかも知れぬけれども、有事の際には何の役にも立たぬものだ。西歐の文明に対し、トルストイ以下これに対する深刻なる批評者を有せし露国に比すると、日本現代の平凡なる思想界は、日本国民が幸福なる国民であつた証拠であらうか。維新当時より生き残れる元老その他の野卑な趣味が国民全体に悪感化を及ぼした故か。或いは迫りつゝある危機を国民が自覚せざるによるか。或いは再び永久の平和のもとに惰眠を貪り、安逸を事とし得べきであらうか。——沈滞せる文壇——

—— 文 芸 雜 感 ・ 11 ・ 1 ・ 日本及日本人 ——

秘伝ということも意義のあることだと思ふ。若し弟子のなかに悪いものがあると、非常の悲劇を起こすようになる。その悲劇は思想に価値があればあるほど惨ましいものになる。強い力を利用するからである。自己に力がある人は、その力を人に与えてよくこれを導くけれども、その死後に起こる悲劇を予防することをせぬ故である。

.....

ゆる波の心のどよみしづまらずわが罪もへどせむすべなかりき
天地の大きちからのまにまゆき罪さながらに生きむと思ほゆ

—— 秋の旅 ・ 12 ・ 15 ・ 日本及日本人 ——

明治四十三年
(上)

文芸の意義は人生を表現することそれ自身に存して居る。すなわち人生を表現することはわが生のための努力である。

客観的対象は主観的経過と相俟って實際的人事活動の出来事となるのである。ゆえに吾人は吾人の官能を通して難値難遇の光明に接し、その威力によって四圍の自然にわが生命を移入せねばならぬ。自然にわが生命を移入することは人生を表現するの謂である。

文芸に於ける表現は言語の媒介によるのである。吾人が思想し、またこれを言語に発することは人生の最も重大なる事実である。その言語が人生を表現するものなるとき、それは人生の不朽の記念となるのである。その言語の意義は、対象の性質と関係とを、その音調は主観的情調を伝え、これを聞くものをして再び実生活上にその暗示を実験せむと努力せしむべき永久の生命の源泉となるのである。ゆえに反省的に対象の性質と関係とを他に比較して理解せむとする叙述的言語よりも、純観照的態度を以ての直観を表現する詩の言語

を以て文芸の根柢とせねばならぬ。現代日本文壇に於ける短歌俳句に対する吾人の努力は、唯一真実のものたるを確信するのである。

フライヤツフエンゲ・クレスト

文芸は音楽建築のごとき自由芸術と比して、その対象たる実人生そのものと直接に相触るゝのである。しかしして実人生の精神的・生活内容に客観的価値を与うるものが文芸であつて、この客観的価値を実験的実在に適用することによつて、こゝに道德的批判の源泉を見出すのである。宇宙の基礎と目的とに對するこの批判の上に築かれたる予想に於いてこの芸術の客観的価値は宗教的信念の最後の根源地となるのである。すなわち各精神的・生活内容は、それ自身に基きたる、また彼自身の意義によつて定むべき価値を有し、以てその精神が自己創造の無極不滅なる連続によつて、それが不斷の境地を保持すべき確信の上に芸術的世界観を建つるのである。ゆえに芸術は精神的・生活の最終の開展階級で、道德および宗教の哲学的理想に、実人生の不可抗力を以ての直観によつて充實せる意義を与うるものである。それは人生の表現に外ならぬのである。

吾々の道德、宗教的信念は、そのためにわが生命を尽すべきものにして、それが水火相交わるの現実生活上の唯一真実の白道たるを確信するのである。——序 言——

実人生の不可抗力（ウン・ヴィダース・テーリッヘ・マハト・デス・ウィルクリッヘン・レーベンス）を認むるといふことが、文芸の根本義である。仮定、空想、迷信を破つて人生に客観的価値を与うることが文芸の使命である。この意味に於いて自然主義的傾向と、いわゆるデカダンの傾向は決して批難すべきものに非ざるのみならず、最も現実に適する真実なる必然的傾向で、実験的実在と一致するものである。人生は無常なりという事實は否定することはできぬ。精神的生活の流転を思うときはすなわち自然に信順せむとする棄却の歓喜に入るときである。人生すなわち生き居ることは常に變化して居ることで、この事實に信順するところに人生の客観的価値すなわち永久の生命が存するのである。

実人生の不可抗力に信順することは、信念に到達したことである。刹那の個々の感覚がたゞちに全人生の意義に融合するのである。ゆえに自然主義を唱うるものにして、単一なる感覚に執着し、これにともなう任意的の浮動せる薄弱なる情緒のまゝに盲動し、厭うべき官能的描写を事とし、或いは歐洲近代の群小作家の作および評論を漫然紹介し、模倣するが如きはもちろん似而非自然主義者である。されどこの盲動的群衆的存在の故を以て漫然自然主義を排するの愚である。殊に信念に到達せざるが故に個々の觀念感情に執する

ものは、それが実行的傾向をとれば肉感描写の誨淫文学となり、智識的傾向をとれば空想描写の娯楽文学となるので、二者間に極めて密接なる関係の存するを看過する通弊に陥らざるものは稀である。ゆえに自然主義を非難するものが夢のごとき空想に耽り、術学的誇示を以て空虚なる内容を矯飾するときには自家撞着である。——実人生の不可抗力——

—— 人生と表現 ・ 1・1・1・日本及日本人 ——

○ 相統する二者は相反するが故に相補充するものである。力はそが生滅の動乱に発動するのである。

○ 自己と自然とに誠実ならざるものは生命に替うるに死屍を以てするものである。

○ 改革者は孤独たるべき偉大を有して居らねばならぬ。かくして始めて偏見と外的願慮とを去るを得るのである。

○ 自然は精神の初歩である。精神を自然化するとき、自然を精神化するとき、信と愛と

を生ずるのである。

○一切の物質的、人為的設備は有限である。詩人の一瞥によって消滅すべきものである。彼らは無窮に転入すべき極促の一瞬を求むるのである。

○詩はその意密にして知り難きものである。しかして堅牢にして傾動すべからざるは極の自然に相応するゆえである。

—— 人生と表現 · 1 · 15 · 日本及日本人 ——

○
少年に対する教訓を思う老人の回顧が現在思想界の一部を支配して居る。教訓は理論テオリーである。客観的内容にもとづく生命の力と熱とを失なつて居る。雑多なる教訓は必ず迷惑を与うるものである。唯一の信念を求めねばならぬ。

信念とは内心直接経験の告白である。雑多なる教訓ではない、空漠なる回顧ではない。

表裏の変化、波瀾の動揺を融合せしむる内心の経験である。個人直接の経験である。ゆゑにこの意味に於いて神秘である、不可思議である、稀有最勝の事実である。

歴史を重んぜむとするは、根本に於いては必然的の要求である。けれども、若し老人の骨董道楽に墮するときは、空漠にして雑多なる教訓の冗漫となるのである。読売新聞に於いて「名士の信仰と娯楽」というのを連載して居る。「信仰」と「娯楽」とは矛盾せる二概念である。信仰のあるものに娯楽があるわけではない。いわゆる名士の大多数が無信仰なるは娯楽を有することによって証明せられて居る。吾々が旧思想というのはこの娯楽のことである。

国民新聞連載の小説「渦巻」朝日新聞連載の小説「冷笑」は一樣に娯楽的生活を主張して居る。無信仰の結果は娯楽に向かうほかはない。文芸が亡国の徴候となるのはこの故である。殊に最近流行の新聞文芸欄のごときが無意義に陥りやすきは新聞の文芸は娯楽文芸に墮すべきは、真文芸が稀有のものであるという動かすべからざる事実の必然の結果である。娯楽文学としての効果を極端に運ばむとすれば不道德の域まで進まねばならぬのも明白である。現実に触れる、触れぬという如き陳腐の空論や、党派の偏見による平凡なる折

衷的批評や、即興的人生觀の小説のごときは少年の遊戯でなければ老人の玩弄にすぎない。着実に活動して実生活および自然の不可抗的威力にともなう沈痛なる悲哀を表現せむとする文芸に非ざる限りは文芸の流行は憂うべき現象である。歴史の研究より得べき国民的自覚と現実の活動より得べき個人の自覚とを時代思潮に生くる個人の実験によって活躍的に融合せしむることは、将来の思想界の使命である。自然主義一派およびこれに類せる思想は最近に於いて主觀的意義を主張するようになった。けれどもそれは歴史的發展を無視するべからざるものたるを思わぬのである。歴史的發展の意義を闡明することによって始めて主觀的価値および意義が充實せる客觀性を有すべきものたるを論ずるものがないのは、空漠なる外国文学の模倣をして居るからである。国語国文学および日本文明に対して何ら新研究もなさずして、漫然理論によって出立せむとするは外国文芸の部分的感染によっての模倣盲動に出づるものである。

世録によって生活し、文武の芸を習得して人の師表となるという如き時代は過去となった。文芸革新会が徒らに英雄的日本という如き空漠の主張をなして、都会の娛樂趣味を有して居るのは時代後れの態度である。上から圧迫されて隠れ遊びをするようなトリビアル

の通人趣味の如きものを英雄趣味と混同するのである。この点に於いては自然主義の方が進歩して居るけれども、主観的方面の修養の不足が写生文一派に現われたごとく、次には自然派にも現われて居る。

ゆえに現実と歴史、個人と社会、権能と責務とを直接実経験によって統一すべき宗教的信念を外にして他の一切は無意義の盲動である。家族、国家の一員として現実のわれを省察すれば、必ず責務を実験せねばならぬ。いわゆる有漏の穢身として具体的個性としては責務を感じねばならぬ。権能は抽象的、一般的概念にすぎない。この事実を誤解せる点にニイチエの超人論の弱点が存し、また一転すれば真理に到達すべき客観内容すなわち苦闘の熱と力とを有して居る。けれどもこの内容は統一せられずに散在せるはツアラトウストの空漠なる象徴主義に墮して居るのが一証である。——最近の思想界——

いわゆる名誉は制限を意味するもので、喝采は玩弄に近いものである。絶対的より相対的に、自然より人為に、永久より瞬間的に、無限から有限に運ぶとき、公衆はこれを理解の対象となすのである。ゆえに理解せらるゝとは征服せらるゝことである。推讃は殺戮で自讃は自殺である。自然とは無極の義である。生は暗黒にして死は光明である。闇黒にあ

って光明を仰ぐべきである。—— 雑感 ——

—— 人生と表現 · 2 · 1 · 日本及日本人 ——

○

われを忘るゝものは大にして、われに没するものは小である。自覚の空虚と願慮の障碍とによって、盲動して生を失なわむとするものは弱者である。

「われかく信ず」と思念するものは小我見の懈慢に墮するのである。真のわれは辺際なく涯底なき自然である。

現実に愛を思わむものは、われを滅尽することによって殊妙の世界に到達せねばならぬ。
.....

大詩人芸術家出でよと叫んだ者は多かつた。けれどもかく叫ぶという事実と、同一の理由によって大芸術家の出現せる時にこれを知らざる者もまたかく叫ぶものである。何となれば大芸術を直接に、真実に味わう人はこれが出現を叫ぶ人ではなく、みづから創作

する人のみである。由来天才は孤独たるべきものである。現代の多数の要求に応じ得るものではないと思う。

—— 人生と表現 · 2 · 11 · 日本及日本人 ——

○

○形体をとったもの、外部へ現われたものは、生命を終わった屍体である。この屍体は偉人が凡俗を誘惑する偶像である。この凡俗の行動を盲動と名づけ、遊戯と名づくるのである。

○現代の青年は教訓に対し耳を閉ぢねばならぬ。老人の過去回顧の誇示に対し目を閉ぢねばならぬ。吾人の直接経験のまゝに進むことは最も自然なる、合理的なる自己の境地を見出す所以であろう。自然と人生とは不断の変化に従がうものである。過去の偶像を模倣せむは未来に空想の幻影を描くと同じである。

○最近に成功雑誌の亜流は、かくの如き人は云々、かくの如くせば云々など浅薄を極め

たる道徳訓を掲載し全国の青年を毒せむとしつゝある。教訓や理想やかくの如きはみな抽象的概念を根柢とせる砂上の樓閣である。表裏の対照を示さずして半面の事態に執着せしむるのである。

○漢学復興その他これに類する最近の思潮は国民的自覚の前駆的感情の発動であって、実行的意志に至る一過程であろう。科学と宗教と芸術と言語と、それが将来を思うときはわれ／＼青年は維新志士遺墨展覧会を見て涙を流してばかりは居られない。

○新時代の青年は過去に対して神秘なる現在の新境界を見出さねばならぬ。神秘とは外部より名づけたる言であって、自らに対しての言ではない。

—— 人生と表現 —— 3・1・日本及日本人 ——

元来信念は内心の実験を外にしては無意義である。信念は無常なる変化に従がう生命そのものである。生死の事実そのものである。信念とは概念ではない、死によっての生であ

る、生によつての死である。生死の事實に信順せねばならぬ。われ／＼が他に感服せざる
ところに信念の出発点を有するはこの故である。われ／＼は一切の人為を否定せむとする
のである。古今の宗教が必ず出離解脱に信念の第一歩を進めしは動かすべからざる事實で
ある。われ／＼は自己をも否定するのである。人生を否定するのである。人生を否定する
ところに人生の眞価値を見出すのである。信樂とは棄却の歎喜である。人間雑善の努力は
純一なる信念の背景である、過程である、整理統一の内容である、智識や能力やかくの如
き人為一切を滅尽し去りたる測量を超えたる境界にわが生の無窮の住持を求めむとするの
である。

—— 人生と表現 ・ 3・15 ・ 日本及日本人 ——

○ 多数として見たる人生は苦惱の人生である。人類共通の欲求は破壊の対象を見出さむ
とするに存して居る。唯一の憧憬を要求する宗教は死を強うるものである。みづから身を

死地に投ずる者は勇者である。何となれば、死地に処してはじめて人生を解脱し得るのである。

不断の變化に従がい、わが生を永久に相続せしめむとせば、その到達点は人生以外にこれを求めねばならぬ。人生の真意義に徹するとき、人生はわが出发点にあらず、歸着点にもあらず、相続せる生の一経過たるに止まるを思うのである。この神秘殊妙の世界は空想の所産には非ずして小我見の迷執を去りたる自然の動乱に信順する所以である。

○芸術上の自然主義は宗教的信念に進むべき現在に於ける唯一の思潮である。けれども荷風の小説を推讃するとき似而非自然主義者にこれを要求するのではない。

○人生を喜劇的に觀察する頓才の人は、みづから喜劇を演ずる人である。何となれば芸術家の目に映ずる広義の自然は、その主観の反映たるべきものである。

○自得の冷笑を以て人生に対する哲学者の芸術批評は、畢竟整理の事務にすぎぬものである。不必要ではないけれども、必要欠くべからざるものではない。

○店頭の裝飾のごとき補綴の芸術は、時好の推移とともに取り片付けらるべきものである。

○盛衰ある作家とは、流行の文芸を作るものである。浅薄なる自己の経験を余りに容易に曝露し尽したる作者の憐れむべき情態を思うときは、読者より優秀なる地にある不易の文芸の作者と愚衆の玩弄となる流行文芸の作者との間の区別を明らかにすることが出来る。

○装飾せるものの心は散漫である。散漫なる文明社会を破壊すべき優者は自然の懷ろに養われたるものでなければならぬ。現代文明を呪えるトルストイの文芸は兎も角も文芸として生命の力を有して居るのはこの故である。

○少年の芸術と老年の道徳との戦いは過去となった。陳腐なる文芸評論を止めて、新生命を有する新芸術を建設せねばならぬ。青年の活動すべき時期は熟せむとしつゝある。準備の時代ではない、一歩々々実行によって威厳を確立すべき時期である。熱狂せる団体的運動よりも孤独の悲哀と、独立の自覚とを鼓吹せねばならぬ。

○老人は歴史の回顧に、少年は未来の幻影を描いて等しく空想に耽らむとする現代思想界に於いて、青年の責務は前后を顧慮して追従を事とせむよりも、外部事情の急変を促し、冗漫なる平和を破って、生を阻碍する屍体の列を葬るべき精神的革命を起こすべき、実生活解脱の勇猛心をもって宗教的信念を実験し、実現することに存せねばならぬ。

○ 文壇の党争

芸術界に於ける党派の存在は、各人が信念に達せざるが故に起こる現象である。信念ある芸術家の眼中は真偽の差別は存ずるとも、党派の種別を認むべきではない。偉大なる精神は孤独である。この孤独の精神より万人に普遍にして永久的なる生命ある芸術が生まるゝのである。芸術は稀有なる天才事業であつて、時宜によつて偶然に集合せる群集によつて成就せらるゝべきものではない。各時代各国の多数の作者、一般文献学者、教授、教員らはこの稀有なる天才出現の準備たるにすぎぬのである。故に、多数の文学者および文献学科出身の教員の世を益すること極めて間接なるはこの故である。

最近早稲田大学出身者を中心とせる自然派に対して、東京文科大学出身者を中心とせる人々が攻撃をして居るようである。確かに青年批評家中には文芸革新会の老衰者よりも活

氣に富んで居る人々であつて、議論も正確であるけれども、何らの積極的主張を見ることはできぬ。また随分見当違ひの自然派攻撃もある。自然派文士中には徒らに客観、主観などの文字を濫用しつゝ、科学と芸術との区別さえも弁せず、ために論難せらるゝべき欠点を曝露して居る。けれどもかゝる党派的の争いは畢竟一時的の現象にすぎぬ。

教訓と告白

告白は自然そのものの反映である。故に力が充実し、生命が活躍して居る。教訓は抽象的法則である。自然の阻碍である。教訓するものの心には過去の功業を回顧するの念があり、告白するものの心には将来の生命を憶う懺悔の念がある。

機械的に活動する者にあつても、その根柢には何らかの一層力強き本質的欲求の存するを疑ふことは出来ぬ。社会にいわゆる活動の人は必要であるけれども、時に静観黙想根柢の力となるべき人も必要である。活動努力するは可なれども、かくの如くして建設したるところのもの一朝にして破壊せらるべくは、かくの如き活動は仰臥惰眠を貪ると拵ぶところなきに至るであらう。

彼らは必ずしも貨幣に換算しうべき価値のみを求むるのではない。それは事実である。彼

らは同じく絶対的の価値すなわち「人」としての価値を求めて居る。絶対価値とは何ぞ、すなわち「人」の価値である。信念である。恋愛である。それが無限の転変に活躍する生の表現である。

—— 人生と表現 ・ 4 ・ 15 ・ 日本及日本人 ——

○

偶 感 数 則

○新渡戸博士の「ファウスト物語」という書が出版された。かくの如くにしてゲーテの傑作が紹介せられたことは、表面から考うれば喜ぶべき事と思うものもあろう、けれどもかくの如き書を歓迎する現代日本の思想界は不幸という如き緩慢なる語を以て評すべからざる境遇にあると云わねばならぬ。何となれば単に梗概として見たる「詩」の価値は何処に存するであろうか。同博士はマドガレットの悲劇について現今女学生の墮落を戒め、高橋五郎氏の訳本の散文的訳文を引用して居るといつて笑って居った友人があった。自分は

その書を見ぬけれども、かくの如き書によってゲーテの傑作が平凡化せらるゝを信じて疑わぬ一人である。

○「自然主義」なる名目を、外国の文芸史家、文芸評論家が如何に使用しようとも、また歐洲の自然主義の作物およびこれに対する批評家の主張は如何にあらうとも、今日日本文壇に於いては、吾々の内心直接の要求から出立せる芸術上の主義としてこそ「自然主義」の意義を認むべきである。模倣受け売りの評論などは役に立たぬ。われは歐洲の自然主義の作物に対して、自らこれに対する見地を有さねばならぬ。自然主義といい、何主義といい、これを科学的研究の分類法と、年代的区分法とに倣って人為的に命名し、煩雜にして要領を得ざる閑事業に没頭する多数の文芸批評家なるものは、前世紀の夢の連続に遊んで居るものにすぎない。芸術は主観を抽象し去りたる仮定のもとに分類せられたる種類の一方面的の問題ではない。全体と相関連したるものである。たゞ平凡人の主観的感想というものは、実は外界の個々の対象の部分的反映にすぎぬものである。主観的感想を排すと云い、無技巧という、みなこの見地からの言であるべきである。

○ゆえに芸術は創作者と鑑賞者との間に、根本的内在的の人生上の全経験に基く信念の

一致を仮定せねばならぬ。その最も卑近なる一例は俳句に於ける季題の感想である。ゆえに各国語に於いて、その語感の上に微妙なる能感性を有するものでなければ文芸について云為する資格はない。

○東京朝日新聞に、警察官の墮落少年に関する観察中、彼らの間にいわゆる新派和歌なるものが愛読せらるゝと云つて前田夕暮かの作数首が掲載せられ、これは姦通を教うる歌であると難じて居る。吾々は元來かゝる歌を歌とは思つて居らぬ。歌になるならぬよりも、言語になつて居らぬ。何となれば歌たるべからざる内実を無理に歌の形式に盛らむとした故である。けれどもかゝる歌を非難するの無益なるは、かく非難する人が健全なる生命ある歌を弁別する能力なきを思うによつて明らかである。不健全なる和歌を排するより、健全なる和歌を奨励すべきである。内心全体の信念より自然に発せるに非ざる、教訓も非難もみな益なきものである。教訓と取締りによつて風俗を改善すべしと思うのであるか。

○懷疑なく確信もなく、頽廢なく力行もない、要するに世人のあらゆる活動は、その大部分は部分的比較により自己を顕著ならしめむとすることを動機として居る。ゆえに人生の物質的基礎たる經濟的活動も或る限界を越すときは、小説家の空想と同一視すべきもの

である、美衣をまとうものは必ずしも美人ではない。

懷疑と云い、確信と云い、そはみな名義の区別にすぎぬのである。定善か、散善か、かくの如き努力も奮斗も、不知不識この人為の努力を脱し、自然の大威力に信順する神秘の力と熱とを有するものにとつてのみ有意義である。教訓に誘惑せられ、他の人生の一面を模倣して盲動するものは最も不幸なる同胞である。世が太平になるときは、かくの如き誘惑的教訓道徳家は彼の淫楽をもって人を誘惑するものと同じく、平和にして沈滞せる社会にパチルスの如くみなぎるのである。

—— 人生と表現 5・1・日本及日本人 ——

○

元來自己の所業を弁明するの不可なるは、罪人は罪を善と見、善人は善を罪と見るべく、罪の果熟するとき悪人はじめてその罪を悟り、善の果熟するとき善人はじめて善を悟るのである。美とは謙讓の謂である。自ら知らざる無価の宝珠である。最近表面無事の社会に、

人を責め自ら高くする偽善者の横行し、浅薄なる道徳訓の次代の青年を誤らむとするとき、いやしくも文芸に携わるものは自己の罪業を告白する勇猛心を以てせねばならぬ。

人類の弱点、人類の罪惡を真面目に告白せよ。次の瞬間に一閃し来る光明こそ生命の力と熱と光とを有するのである。

東京朝日新聞の文芸評論中「文芸は政治や道徳や宗教と並立して」と云って他に從属すべきものでないと論じて居る。もちろん文芸は政治や道徳に從属すべきものではない。けれども「政治や道徳と並立して」と云うのは間違っている。宗教道徳と對比するならとも角、文芸と政治と對比して論ずるのは無意味である。「文芸」という名と「政治」という名とは、全く異りたる見地より名付けたる一概念である。文芸は政治的活動をも内容とすべきは、文芸の内容は人生なることによつて云わずとも明らかである。故に文芸と他との關係を論ずべくば、文芸と科学、あるいは審美的感情と宗教道徳的感情との關係を論ずべきである。空漠なる文芸論の一例はかくの如きものである。

○ 文 芸 に 対 す る 迷 想

自然の間に、自然とともに生活し、文明の娯楽の有毒なる呼吸を遠ざけ、物質的願慮を要せず、肉体的に健全にして創作の静観に適せる生を送らむは、それが十分なる自我の覚醒に基くものなる時は、それは各人の一度は必ず経験すべき死滅の寂静を生にありて味わいつつ対^{コンテラスト}照によって強めらるべき生存の活力を無極の開展に導く強烈深刻なる情調のもとに感得する所以なるを思わねばならぬ。それは都会生活の繁雑なる外的活動に接して飽厭の吐気を催おすものにとりては止むを得ざる必然の要求である。科学の進歩に基く、唯一の生の目的に達すべき雑多なる手段方便の設備の発達は、唯一の目的を忘れて雑多なる手段方便に究極の力を求めむとするに至りたる、外部に動揺して内部に静止せる最近世の社会情態を現出し來つたのである。かくの如きいわゆる活動の社会は敏感を欠きたる頑健の身体

および痲痺したる官能が極端なる機械的刺戟を要求する人々に取りては全く無意義であるとは思われぬ。けれども、一般芸術の表現の内容は、外部に動揺して内部に静止せるものに非ずして、外部に静止して内部に動揺せる生活、すなわちその生命の開展を将来に期待すべき、永久に少年的なる、ゆえに無極の生命を有する、稀有なる強さと深さとを有する生活でなくてはならぬ。

しかるにいわゆる自然主義派は文芸に対する技巧の出立点に対する注意をもって直ちに終極の法則たらしめむとし、こゝに表面の現実に随順するをもつて能事終れりとし、嫌うべき放肆の生活に墮するに、内心の欲求よりもむしろ外部流行の誘惑によること婦女子の如く、また自然主義に反対して哲学を説き、宗教を説かむとするものは内的静寂の生活が、内的自覚の結果に非ずして外的圧迫に強いられたる空想派に墮せざるものは稀有である。自然派も、これを非難する一派も、文芸に対して取締りをなさむとする当局者および不健全の文芸を非難せむとする一部の公衆の実生活のごとき、みな五十歩百歩の差、同じく自覚にもとづく静寂の内的生活すなわち唯一主観の開展の眞実の感奮を實驗せざる思想界の亡者にすぎぬのである。歐洲近代の群小作家の如きも同じく皮相の現実に随順するを究極

とせる近世的生活の走狗にすぎざるもの、卑猥なる動作、瑣末の現象を、冗漫繁雜に叙述するに努力する勞働者である。雜多なる手段方便を唯一目的に導くに非ずして、その手段方便の前に屈服せる自覚なき無氣力者である。故に歐洲の群小作家および徹底せざる美學者、文芸史家らの空論を模倣して創作し評論するがときはいわゆる亡國の文芸である。

.....

近く創刊せられたる「三田文学」はその内容および体裁と調和せることき福沢翁の古くさき格言の真蹟を表紙裏へ印刷してある。

「文芸の嗜みは人の品性を高くし精神を娛しましめ、これを大にすれば社会の平和を助け、人生の幸福を増すものなれば、またこれ人間要務の一なりと知るべし」

かゝる愚かな門外漢の旧思想を批評する勇氣もなければ、かくの如き文芸に対する迷想は、今日の文壇および公衆の文芸に対する無知を表示せる顯著なる一例であるのみならず、その編輯者の不見識は驚くべきである。

「嗜み」という、芸術を玩弄品と心得、味わうべき食物の一種とでも思つて居る、方便手段に没頭せる物質論者の言である。「精神を娛しましめ」なども芸術は色味の感覚によ

って快感を与うるものではなく、全精神の興奮緊張の動乱を活躍せしむるものたるを知らずして、知れるごとき言をなせる、笑うべきもの、また「社会の平和を助け」という如き、芸術は新生命の先驅たるべく、時に革新の機運をも催進すべきもの、情氣に満ちたる平和の表皮を破って内実の活動せる新生命に触るゝを目的とせねばならぬを知らぬものである。最後の「人間要務の一」という如き、最もよく文芸に対する俗人の迷想を發揮せるものである。文芸は天才の事業である、少くも稀有なる境遇遺伝のもとに稀有なる実験を得たるもの告白たるべきで、決して各人の要務ではない。若し各人が要務として文芸に携わるならば遊衣徒食の徒、世に充滿するの如き現象を現出するであろう。宗教にせよ、文芸にせよ、偶像のまえに礼拝する多数の信徒はことごとく二、三偉人のために誘惑せられたる盲動者にすぎぬのである。ゆえに一般公衆をして盲動せしむべくば「福翁百話」のごとき平凡なる思想の方危険少なく、文芸の真意義のごときは福沢翁に理解せられざるところに存すると同時に、福沢翁の真価値も文芸の真価値を理解せざるところに存ずるであろう。

○
骨董趣味の弊

芸術の内容は実人生である。ゆえに芸術の創作と鑑賞はそれ自身に目的を有し、一方実人生に何らの関係なき遊戯と相類する点あるより二者を混同するのである。元来古代美術の価値は厳密に云うときは、現代の鑑賞者の会得と分離して考うることは出来ぬのが芸術の芸術たる所以である。人をはなれて芸術品の意義はない。若しこれを金銀珠寶のごとく売買の目的物とすることばに於いては芸術本来の価値を認むることは出来ぬ。またその金銭に換算する標準たる画家の品位をあたかも爵位勲等の階次のごとく心得居るとき、みな芸術本来の意義を没却せるものである。畢竟芸術を物質的に取り扱い、分解的部分の技巧のみを観察し、あるいは単に名目を重んずる如きを総称して骨董趣味というのである。茶道の達人であった吉良上野介が「妙に風流の風をして居るものに、変な毒々しい欲張りのある」一例なもの如き理由であろうと思う。要するに悲痛なる人生餓を欠き、皮相

の現実に執し、瑣末の技巧を重んじ、現世的樂天的なる芸術愛好者は芸術の賊である。芸術をさきにすべきか、人生をさきにすべきか。芸術をさきにせむとするものは悪戯にふける頑童の残忍性を有する、無邪気なれども有害なる人々である。

一般に骨董趣味と云い古代美術を賞玩するは決して排すべきではないけれども、若しひとたび芸術の真意義を考え、そが人生と相離れて何の意義もなきものなるを知るときは、骨董の愛玩が創作の勇気を挫き、あるいは創作の内容たるべき実人生上の活動を阻碍するものなるを恐れねばならぬ。静座黙想するは可なりとするも、黙想するに偶像その他の道具を要するに至るは内心の感激の薄弱なるを証するものなるを思わねばならぬ。大都の紅塵裡に鋼鉄製の機械と競走して活動するの無意義なると同様に、骨董癖は単に与えられたる物質を弄して覚醒を恐れて遊戯にふけるものである。ゆえに靈と物との二概念を以てせば、物はつねに罪惡の原因となるのである。骨董趣味というも畢竟凡俗の物質主義の一変形にすぎぬので、表面風流を装うだけその罪惡は悲惨なる結果を来すのである。

罪惡告白の意義

自己の罪惡を思うときは、内心満足の喜悅を感じるときである。暗黒を感じずるは光明の

投ぜられたるときである。ゆえに自己の罪惡を告白するは勝利者である。決して劣敗者ではない。宗教上の懺悔もこの意味に於いて真價値を有するのである。ゆえに大なる芸術がその表現の内容に人生の悲哀を以てするは必然の結果である。罪惡は自覚せざるもの業である。ゆえに現実社会を表現の内容とせむとする自然派作者が人類の罪惡を描くを以てたゞちにこれを非難するのは芸術と人生との關係を洞察せざるゆえに起こる迷想である。もちろん自然派文士の行動に排斥すべきものがある。けれども現代社会一般から見て罪惡を犯せるものは他に著しき例を發見するに苦しまぬであらう。人生を戦斗と観ずるに於いては、これを表現する作者はその戦斗を最も活躍せしむる技巧を択ぶべきは当然である。現実に処してその暗黒の威力を感じるときはすなわちその暗黒より脱したるときなるを思い、自覚せざる真に救うべからざる同胞を救うためには人間罪惡の戦斗の記述を以てせる文字によらねばならぬ。ゆえにいわゆる自然主義を攻撃せむとならば、まづ文芸そのものを根本より論じて若し文芸を不必要なりとせば文芸全体を否定し、進んでは人生全体、人類の生存をも否定し、人類の生存を以て罪惡の根本的原因とせなばならぬ。若しこの点に想到するときは人生を表現せむとする内心の衝動を感じるとき、すなわち吾人の精神生活

の最終開展階級に達し、憶念の力によって無常なる部分の人生に全生命無窮の影を投ぜむとして、表現せられたる人生に客観的価値を与えむとする時である。自然主義なる名は誤解を招き易けれども、それが吾人内心直接の要求より出立せる主義なること、彫刻に於けるロダンのその如きに於いてはこれを非議せしものは最後の勝利者ならざりしは事実によって証明せられたる所なるを思わねばならぬ。自然主義者が印象的技巧を拵び、あるいは象徴的題目を拵ぶが如き、畢竟作者の全精神的内容に依立すべきもの、区々たる名義によって芸術の価値に高下あらしめむとするは空論家の閑事業である。

信仰なき芸術家

信仰の一言はたゞちに芸術の自由に対する圧迫として反感を以て迎えられるるのである。何ら客観的価値なき伝来の抽象的名義のもとに偶像の崇拜に陥り、あるいは信仰の仮托をもつて実利の方便とせむ如きは吾々の最も嫌惡するところである。さりながら単に芸術に対する信念という、その芸術なる名義もまた畢竟抽象的概念たるをまぬかれず、或いは人生の爲めと云う、人類の爲めと云う、かくの如き一切の抽象的概念を愛せむとするの自然なるは、畢竟人為の技巧にすぎぬのである。ゆえに吾々はかくの如き一切の抽象概念の

代りに、たゞちに個人崇拜に赴かむとするのである。人類を愛せむとするのではなく、たゞちに人を愛せむとするのである。階級や外的威儀の一切に対して無感覚にしてたゞちに唯一の心を重んぜむとするのである。他を真実に直接に愛するものは自己を空しうするものである。高きを求むるものである。現在の自己に安住せざるものである。彼らの自負は自己の価値に存ずるには非ずして彼らの愛するものの価値、すなわち愛することの念力に存するのである。翻って日本現代の芸術家の求むるところ、すなわち力の最後の根柢の何なるかを思うとき、必ずしも名利の末に走るもののみならず、その求むるところは漠然として捕捉すべからざるもののみである。吾々は生命の閃きを見ずして、雑然たる屍体の堆積のみを発見するのである。二千年來概念の幻影の前に跪き来れる日本民族は思想界の革命者を要すべき時期に到達せるを思わねばならぬ。

三井甲之選集出版経緯

編者 宮崎五郎

三井甲之という存在が如何に偉大であったかということは、一般には到底理解できない。予言者だからである。詩人だからである。学者だからである。

三井甲之を理解し、三井甲之に共鳴したと称する者は数多いことであろう。だが、それらの者らが真に三井甲之と一体のいのちを生きたかということは疑わしい。なぜなら、死后十三年を経過した今日、いまだに全集刊行の企てすら聞かぬからである。

三井甲之と一ヶ月を前後して没した齊藤茂吉、釈超空（折口信夫）の全集は立派に完成した。——十年もむかしの話である。師匠はつまらなくても、弟子らの振舞いは立派であった。

敢えて全集という形にこだわる訳ではないが、伝家の神宝、三井甲之を、千歳の暗室、におしこめておいて、水増し、つぎはぎの贗作論文を世間に売り出す弟子の忘恩は許せな

い。かつては私自身も、虎の威を借る狐、であり、鶴のマネをする烏、であり、錦の御旗、を振りかざすサギサカ、バンナイであった。

三井甲之と一体の呼吸をとれば、生きながら死を覚悟せねばならぬ。死を云うは易い。死を実感し、死を行ずるは至難のわざである。若冠二十数才の青年三井甲之が明治の末期に書いたものは、ことごとく今日を予言している。生きながら死したるが故に、である。

全集は恐らく絶望であらう。文献も日とともに散佚しつゝある。全著作の35量と推定される私の所蔵も、いづれは散佚の運命を免れまい。なぜなら、三井甲之と心中するほど現代の知性は素朴ではなく、三井甲之の魂と交流するほど高い次元の靈性を持つ者はその同調者にも見当らぬからである。

かつては私も、死ぬまでに必ず全集を出すと意気込んだ。だが、そのヨミは浅いヨ、と地下に故人が微笑んでいるような気がする。せめて私家本の選集だけでも存したいと云うのがこの世の終末期を迎えた私の最後の願ひであった。

この動きを逸早く捕えたのが日本無双のわざ（技）師細田勲次であり、無条件援助を約したのが三井門下の俊秀、小田村寅二郎、小川幸男、木村松治郎の三名であった。

この企てに結果的には間接的な妨害となった者もある。その名は云わなくても地下の三井甲之はちゃんと知っている。そして——私は世間を顧慮しない。世間とは、わがゆく手に立ちほだかるもろくである。

B 6 一〇〇頁タイプ謄写限定二〇〇部というこの小冊子は、不世出の天才三井甲之を記念するには余りにもお粗末である。だが、私は、百年のうちに知己を求むる覚悟をもつほど寛容でもなければ悠長でもない、三井甲之は、

・三昧の神力を以て一処、一念、一時に自己を宇宙に遍満せしむる時、すなわち生の瞬間的、全体的発展の実験を以てする、すなわち生死の境いに入出して、骨髓に徹入する感激を実験するのである。と云った。

・生きるとは死に近づくこと、すなわち死ぬことである。と云い、人生の問題を終局まで押しつめると、生死の問題になる。生に執着するのも、死を怖るゝのも、一方面、一部分を見るにすぎぬ。とも云った。

・自然は苦惱、愁嘆、虚妄。障碍に満ちて居る。自然の真を洞察することは、生きつゝ死を味わうことである。とも云った。

「一処、一念、一時に自己を宇宙に遍満せしめた。三井甲之のいのちの金字塔を記録する遺稿も、恐らく百年を出でずして湮滅するであらう。しかし、この小冊子を手にするであらう人々は、この刊行に協力した諸兄とともに三井甲之と不二一体の感激を味わう選ばれた人々であることを確信する。

編者のごときは、すなわち三井甲之の云う「盲動の兵卒」にすぎない。兵卒というのが千両役者を檜舞台へセリ上げる奈落のロクロまわしの人足である。

聞け、三井甲之の沈痛な予感的遺言を！

「大なる人格は必ずしも目に見ゆる事蹟のみを残すものではない。連せられざりし意志は必ずこれを完成すべき後の者に伝わるのである。」（明治四十四年）

三井甲之選集

昭和40年10月25日発行

定価 ㊦ 200

編者 宮崎五郎

発行者 木村松治郎

発行所 しきしまのみち会大阪支部

大阪府枚方市香里丘7丁目6の11

宮崎五郎編 限定三〇〇部

無限生成 (三井甲之書翰集)

B 6 版 二〇〇頁
価二〇〇円 郵四〇円

しきしまのみちとたなすゑのみちの関連を詳説し、このみちひとすじに生きぬきし風雪五十年の回顧と、苦難にたち上る日本と日本民族の未来につなぐ光明の展望——地上生活への袂別を永遠の別離たらしめざらむとする偉大なる哲人の呼吸を伝うる珠玉の書翰。
文中長詩一篇、短詩十三篇、和歌九十二首、俳句五句、墓碑銘「石ニシルスコトバ」を点綴し、近づく臨終を予感して編者に口授せられししきしまのみち秘伝の筆録にむすぶ永久記念文献。

東京・世田谷郵便局私書函34号

発行 手のひら療治研究会

振替 東京73999番

かつては正岡子規が唱道し、三井甲之が実践した連作和歌のみちを三十余年歩みつづけた著者の自選歌集。

昭和四年以降三十九年春までの六千数百首のなかから選りすぐった作品三千余首を収む。かねて香でん歌集と覚悟していたものが、生きてゐるうちに陽の目を見やうとは思はなかつた。

— 著 者 —

B6版 四〇〇頁
写真・筆蹟

金文字クロス表装
箱入

二〇〇部限定版

価三〇〇〇円（郵共）

自選
歌集

風

（かぜ）

宮崎五郎

歌集、風、にふれて

喜島康

手に持つにたえないほど重量感のある二本です。この歌集を読む人はほんとうに選ばれた方だと思えます。これに触れる人は、お守りを持つたと同じで、将来きつと辛せにめぐり逢う運命の人だと思えます。感激に心が波立ち、読んでいるうちに涙があふれ、人まえては押えるに苦しいほどです。しみじみと人生の淋しさを味わいながら、その中に限りない喜びを見出す二本です。文字に記録されたクラシック音楽とも言えると思えます。

発行 しきしまのみち会大阪支部

取次 手のひら療治研究会

ことばにより神秘を味わう新時代の書

既刊 第一輯——第九輯（以下続刊）

各巻 B6版 七〇頁 価一五〇円 郵三〇円

いのちのあゆみ 宮崎五郎

いのちのあゆみを読んで

喜島康

お言葉のひとつひとつがむづかしいのに、読んでゆくうちにしっくりと胸に落付く御本です。

今まで有名な宗教や心霊の書物もいくつか読んでみましたが、分り易く書いてあるのに、スグ眉間が痛くなります。眉間が痛むのは気枯です。

心のしこりがひとつづつ融けてゆく詩です、厚い氷や雪が太陽の光に融けるように。

人はみんな気枯を持っています。それを解きほぐし、祓う最高の詩です。永遠の安らぎを与える書物です。先生と共に息づき、先生の亡きあとに光を残す書物です、いのちのあゆみは。

発行手のひら療治研究会





